大阪府埋蔵文化財調査報告2010－４

鮎川・ミクリ遺跡

－都市計画道路富田奈佐原線整備事業に伴う発掘調査－

大阪府教育委員会

鮎川・ミクリ遺跡

－都市計画道路富田奈佐原線整備事業に伴う発掘調査－

大阪府教育委員会

はじめに

都市計画道路富田奈佐原線整備事業にともなって茨木市鮎川に所在する鮎川遺跡と高槻市西町に所在するミクリ遺跡の発掘調査を実施しました。この二つの遺跡は市の境界で接して所在しており、本来ひとつの遺跡として考えることができます。これまで古墳時代や中世の遺物の散布が確認されており、その時期の集落跡が存在することが推定されていました。
道路の拡幅と歩道の整備にともなって実施した今回の調査では、遺跡を縦断するように細長い調査区を設定することになりました。その結果、鮎川・ミクリ遺跡の集落の周辺の様相が明らかになりました。さらにこの地における弥生時代から連綿とつながる人々の営みの歴史も理解することができました。

鮎川・ミクリ遺跡は摂津山系から流れ出た安威川の左岸に形成された遺跡です。周辺には弥生時代中期はじめ頃の目垣遺跡、弥生時代中期から中世まで多様な遺構と遺物の出土する溝咋遺跡が所在し、式内社溝咋神社とその関連遺跡もあります。また一帯には条里制の地割りの痕跡もみることができます。このような豊かな歴史的環境の中に鮎川・ミクリ遺跡は立地します。

今回の調査は、これまで解明されてきた地域の歴史、さらにそのすき間を埋める貴重な成果です。広く活用いただければと考えます。

調査に当たっては、大阪府都市整備部交通道路室、大阪府茨木土木事務所、茨木市教育委員会、高槻市教育委員会のご協力をえました。調査に理解を示していただいた近隣住民の皆様と併せて深く感謝の意を表します。引き続き、府民の皆様方には文化財の保護にご理解とご協力いただきますようお願いいたします。

平成23年３月

大阪府教育委員会事務局
文化財保護課長　野口　雅昭

例　　言

1．本書は、大阪府教育委員会が、大阪府都市整備部交通道路室の依頼を受け、都市計画道路富田奈佐原線整備事業に先立って実施した鮎川遺跡（茨木市鮎川）とミクリ遺跡（高槻市西町）の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は４ヶ年にわたり実施し、それぞれの年度の調査番号は平成17年度05046、平成18年度06024、平成19年度07028、平成21年度09040である。

3．現地調査は、大阪府教育委員会文化財保護課調査第一グループが担当し、平成17・18年度は技師井西貴子、平成19年度は副主査小浜 成、平成21年度は主査小林義孝が実施した。報告書作成にかかわる遺物整理は、調査管理グループ主査三宅正浩、同副主査藤田道子が平成22年度に実施した。

4．調査の実施にあたっては、大阪府都市整備部交通道路室、大阪府茨木土木事務所、茨木市教育委員会、高槻市教育委員会、地元自治会をはじめとする諸機関、諸氏の協力を得た。

5．本調査の写真測量は、平成17年度は写測エンジニアリング株式会社に、平成18年度は株式会社アコードに委託した。なお、写真撮影フィルムについては、受託会社において保管している。

6．本書に掲載した出土遺物の写真撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。

7．本書の執筆・編集は井西、小浜、小林、調査第一グループ副主査林日佐子が行なった。

8．本書は300部を印刷し、一部あたりの単価は494円である。

凡　　例

1．文書に用いた標高は、東京湾標準潮位（T.P.値）による。座標値は、世界測地系平面直角座標Ⅵ系によるもので、方位は座標北を示す。

2．土層の記載に用いた色調は、『新版　標準土色帖（23版）』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）2001．１によった。

本　文　目　次

はじめに
例言
本文目次　挿図目次　写真図版目次
第１章　調査の経過と方法……1
　第１節　調査の経過……1
　第２節　調査の方法……2
第２章　位置と環境……3
第３章　調査の成果……5
　第１節　基本層序……5
　第２節　遺物包含層出土の遺物……7
　　（１）　第３層出土遺物……7
　　（２）　第４層出土遺物……7
　　（３）　第５層出土遺物……8
　　（４）　第６層出土遺物……10
　第３節　検出遺構……11
　　（１）　Ｃ－１・２区（05046）第５層上面……11
　　（２）　Ｃ－１区（05046）第４層下面……13
　　（３）　Ｂ・Ｃ区（06024）第６層上面……14
　第４節　B区（07028）の調査……15
　　（１）　基本層序と検出遺構……15
　　（２）　出土遺物……16
　第５節　Ａ区（09040）の調査……18
第４章　まとめ……19

挿　図　目　次

図１　鮎川・ミクリ遺跡の位置
図２　調査区の位置
図３　調査区配置図
図４　鮎川・ミクリ遺跡とその周辺
図５　弥生土器
図６　笹塔婆
図７　周辺の条里地割の復元
図８　調査区断面模式図
図９　平成17年度（05046）・18年度（06024）調査　出土遺物（１）
図10　平成17年度（05046）・18年度（06024）調査　出土遺物（２）
図11　Ｃ－１・２区（05046）遺構全体図
図12　遺構２・３　平・断面図
図13　遺構５・９・10　平・断面図
図14　Ｃ－１区（05046）第４層下面検出遺構　平・断面図
図15　遺構17　平・断面図
図16　Ｂ区・Ｃ－２区（06024）畦畔検出状況
図17　Ｂ区（07028）第４層上面　遺構平面図
図18　平成19年度（07028）調査　Ｂ区出土遺物
図19　鮎川・ミクリ遺跡と溝咋遺跡

写　真　図　版　目　次

図版１　遺跡全景
上：鮎川・ミクリ遺跡全景（北西から）
下：鮎川・ミクリ遺跡全景（南から）
図版２　調査区全景
上：平成17年度（05046）調査区全景（南から）
下：平成17年度（05046）調査区全景（上空から）
図版３　調査区全景
上：Ａ－１区（05046）付近
下：Ｂ－２区（05046）付近
図版４　検出遺構
上：Ｃ－１区（05046）第５層上面検出遺構
下：Ｃ－１区（05046）第４層下面検出遺構
図版５　検出遺構と遺物
上：Ｃ－２区（05046）検出遺構
下：Ｃ－２区（05046）遺構26出土遺物
図版６　調査区全景
左上：Ｂ区（06024）　右上：Ｂ－５区（05046）
左下：Ｃ－２区（06024）畔畔検出状況　右下：Ａ区（09040）
図版７　検出遺構
上：Ｂ区（07028）第４層上面検出遺構
下：Ｂ区（07028）断面
図版８　土層断面
上：Ａ区（06024）断面
下：Ｄ区（06024）断面
図版９　出土遺物
図版10　出土遺物
図版11　出土遺物
図版12　出土遺物
図版13　出土遺物

第１章　調査の経過と方法

第１節　調査の経過

都市計画道路富田奈佐原線整備事業にともなって、茨木市鮎川に所在する鮎川遺跡と高槻市西町に所在するミクリ遺跡の発掘調査を実施した（図１）。当該都市計画道路沿いの鮎川郵便局から北へ約350ｍの範囲である。既存道路の両側において歩道が設置されるとともに車道の一部が拡幅された。そのため調査地は、概ね幅５ｍを測るのみのものであったが、遺跡の中に細長いトレンチを設置することとなった（図２）。

発掘調査は４ヶ年度にわたった。平成17年（2005）度は当該地の南部地区（鮎川遺跡）を対象とし、平成18年（2006）度は北部地区（鮎川遺跡とミクリ遺跡）の調査を実施し、概ね当該事業のかかる発掘調査は終了した。しかしこの時点で北部地区におけるミクリ遺跡の範囲内で数ヶ所の未収用地が存在していた。このため平成19（2007）年度と平成21（2009）年度においてこの調査未了の地点における小規模な発掘調査を実施した。

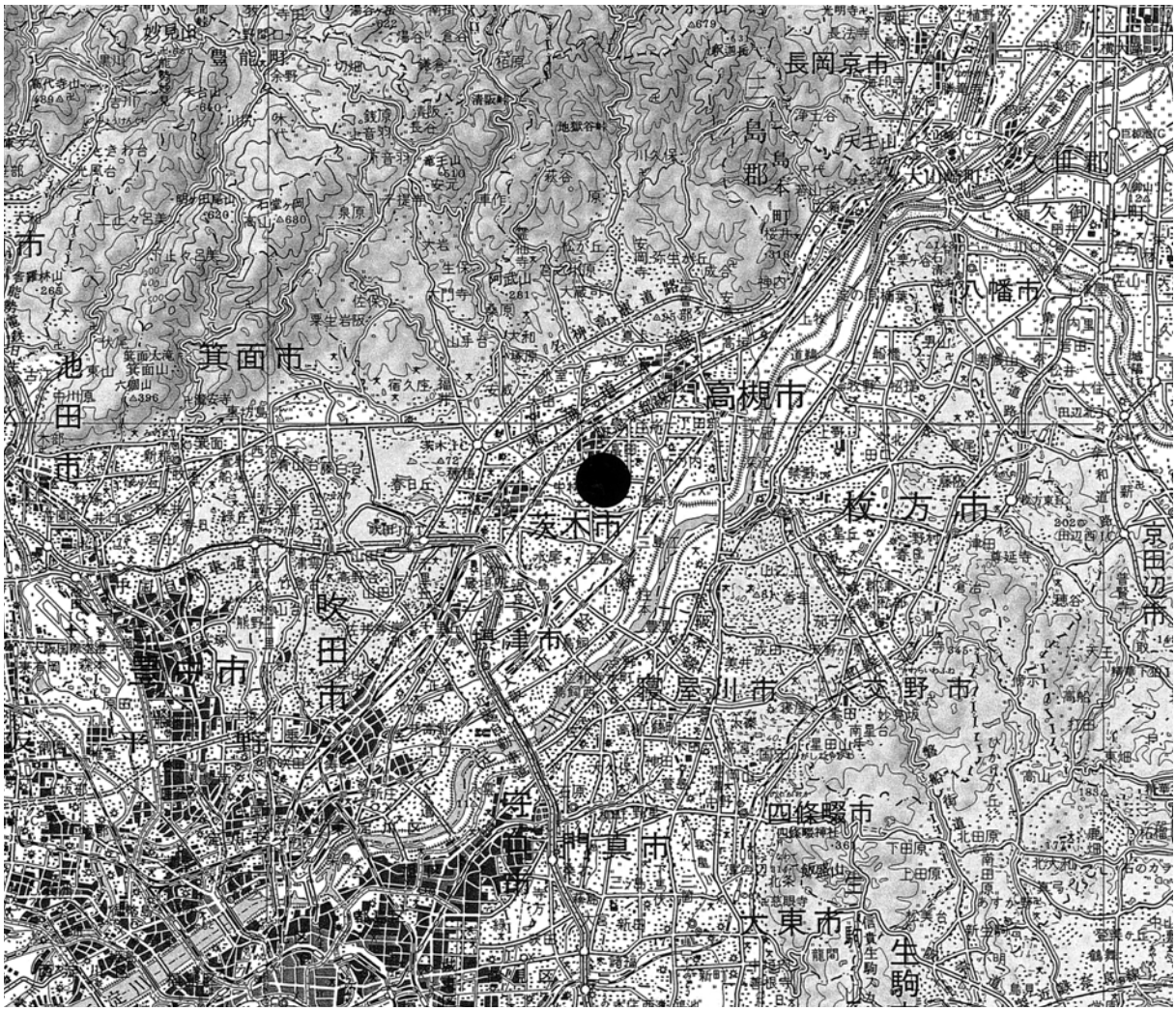


図１　鮎川・ミクリ遺跡の位置（Ｓ＝1/20万　20万分の1地形図「京都及大阪」国土地理院より）

第２節　調査の方法

発掘調査は、幅５ｍ前後のトレンチを南北約350ｍの範囲に設置した（図２）。しかし調査開始時においては調査の実施ができない地点が散在する不確定な要素も多かった。そのため各年度に実施した調査地点が錯綜する結果となった（図３）。

調査地は、住宅地の中に位置しており、調査の実施に当たっては近隣住民と調整する必要があった。そのため調査区は、小面積に分割して設定せざるをえなかった。調査成果の記録は基本的に空中測量によって行ったが、一部狭小な地区では調査担当者が現地測量を実施した。

各調査区の名称は、各年度の調査においてアルファベットによって呼称している。４ヶ年にわたる当該調査においては、例えば「Ａ区」のように、それぞれの年度の調査において存在し、全体で四つの「Ａ区」が存在することになる。これを区別するために「Ａ区（05046)」のように地点を示すアルファベットのあとに当該年度における本調査の調査番号を付す。

各年度の調査番号は、平成17年05046、平成18年度06024、平成19年度07028、平成21年度09040である。

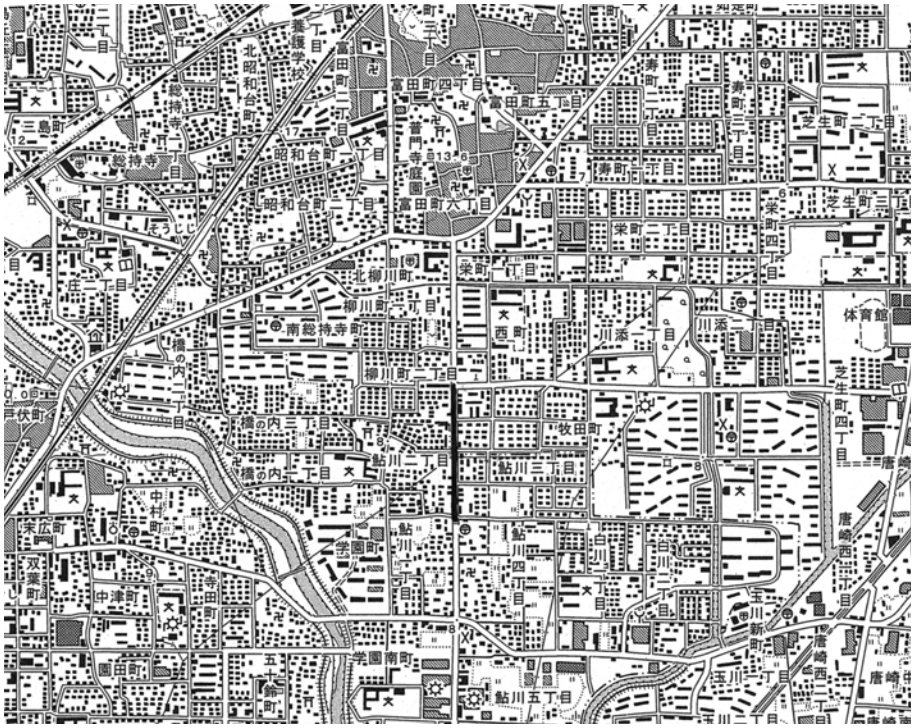


図２　調査区の位置（Ｓ＝1/2.5万　2万5千分の1地形図「吹田」国土地理院より）

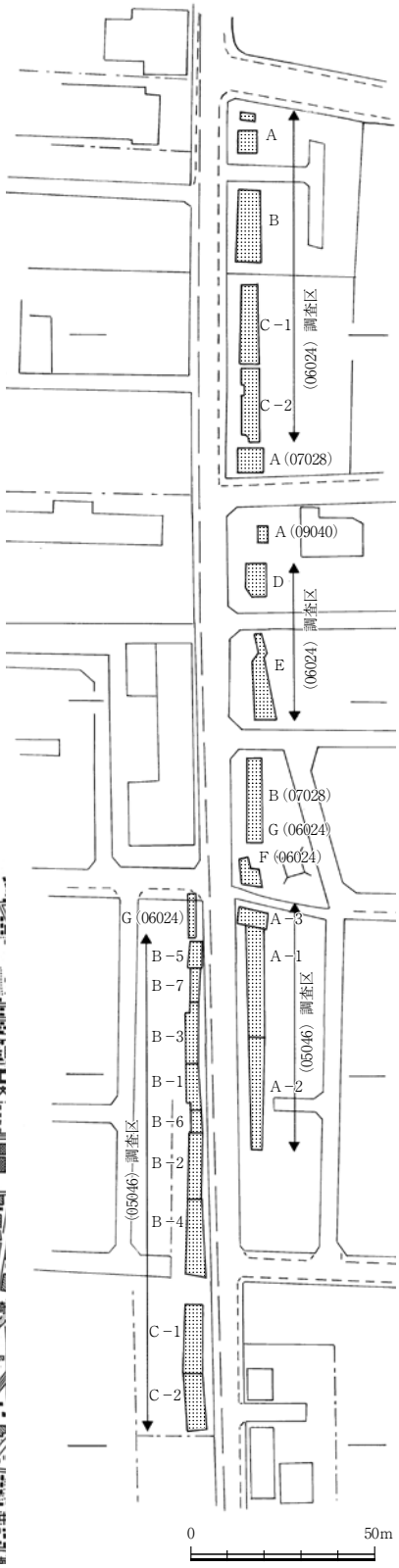


図３　調査区配置図

第２章　位置と環境

鮎川遺跡は茨木市鮎川に、ミクリ遺跡は高槻市西町に所在する。両遺跡は両市の境界によって接している。既往の調査によって鮎川遺跡は時期不詳の集落遺跡、ミクリ遺跡は古墳時代と中世の集落遺跡とされてきた。しかし、二つの遺跡は市境界によって別の遺跡とされているが、本来ひとつの遺跡として理解できる（図４）。

今回の調査区の南部地区は近世の鮎川村に発する集落を横断する。鮎川村は、近世には摂津国嶋上郡と嶋下郡に分かれていた。中世には両郡のどちらに属していたかは明らかでないが、当該

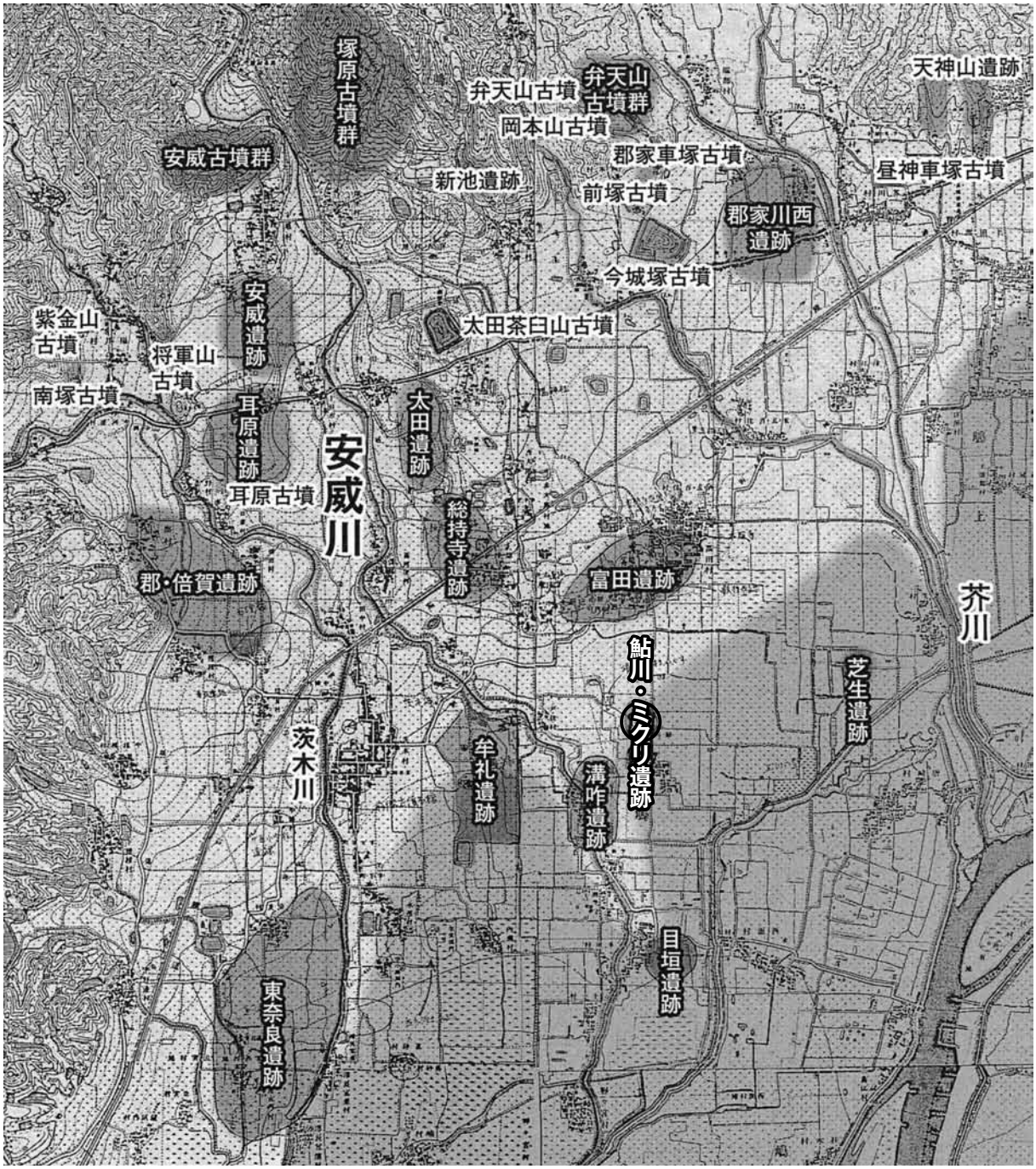


図４　鮎川・ミクリ遺跡とその周辺（『溝咋遺跡』2000年より）

調査区が二つの郡の不明確な境界上に位置していたことは明らかである。

鮎川遺跡・ミクリ遺跡は、東の玉川と西の安威川に挟まれた地域に立地している。しかし「鮎川」という地名は、地域では「あいかわ」とも発音され、これは「安威川」が訛ったものといわれるように、安威川と不可分の関係で形成されたものと推測される。この一帯は安威川と玉川が形成した沖積地が広がっており、遺構などが埋没している深度は大きく、これまでに遺跡の広がりが確認された範囲は必ずしも大きくない。しかし安威川が形成した微高地にはいくつか顕著な遺跡が確認されている。

目垣遺跡は、弥生時代前期にはじまり中期初頭には大集落となる。弥生時代前期のものとされる瓢形の壺形土器の上部に付した人面部分が著名である。鮎川・ミクリ遺跡の西方に展開する溝咋遺跡では弥生時代から中世まで連綿と多様な遺物・遺構が検出されている（図５・６）。さらに式内社溝咋神社の上の宮跡も検出されている。上の宮は1909年（明治42）に下の宮であった現在の溝咋神社に合祀されたものである。発見されたのはこの上の宮の旧社地である。溝咋神社は安威川の両岸に二つの社地をもち、両岸に影響をもったものであろう。溝咋遺跡は安威川が形成した微高地に立地する。その東側の縁辺あたりに立地するのが鮎川・ミクリ遺跡である。二つの遺跡は、集落域とその周囲に広がる耕作地というように長く不可分の関係にあったと推測される。

また、天坊幸彦によって中世には成立していた安威川の両岸の条里制の地割が復元されている。鮎川・ミクリ遺跡も、この範囲に包括されている（図７）。

このような地理的・歴史的環境の中に鮎川・ミクリ遺跡は存在している。

なお、本章は合田幸美ほか『溝咋遺跡（その１・２）』（(財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書　第49集　2000年）を参考にしている。

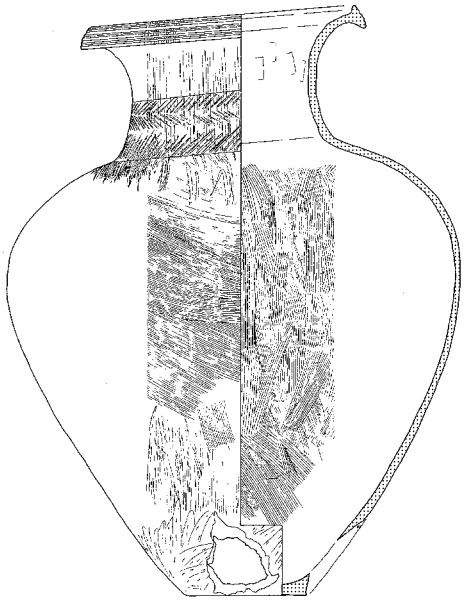


図５　弥生土器

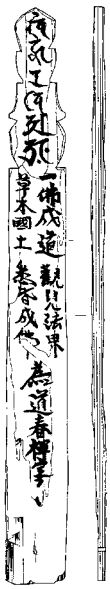


図６　笹塔婆

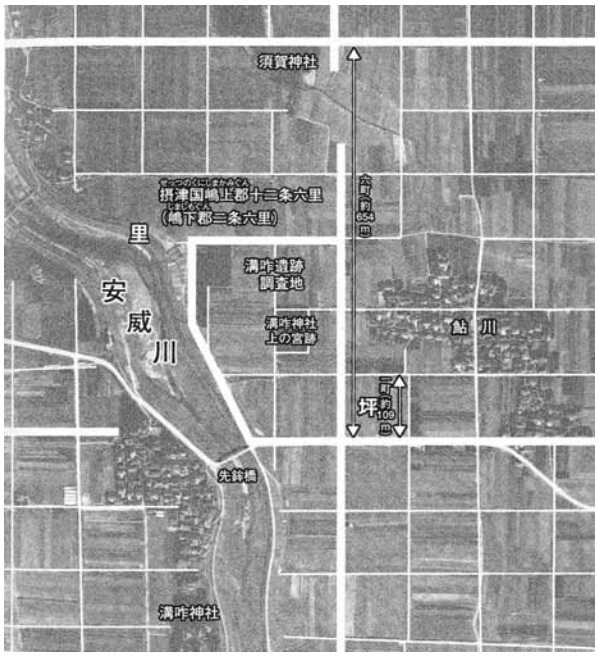


図７　周辺の条里地割の復元
（『溝咋遺跡』2000年より）

第３章　調査の成果

当該調査の大部分は、平成17年度（05046）・18年度（06024）に実施した。まず両年度の調査成果について整理する。

第１節　基本層序

第０層から第６層まので７層が調査区全体で確認された（図８）。

第０層　盛土。調査区全域で確認される。厚さ1.4～1.6ｍを測る。調査区一帯が、都市化の波に押されて住宅地化される時点で施されたものと推測される。

第１層　旧耕作土 。住宅地化される以前は一帯には耕作地が広がっており、この土層は調査区全域で確認された。その形成過程の違いからか地点ごとで層の数に変化がある。Ｂ・Ｄ・Ｅ区では６層にも細分することが可能であったが、調査区全体を見渡すと３層を基本とする。

しかし最上層は住宅開発直前の耕作土である。ほぼ調査区全体で確認された。上面の標高はT.P.＋7.5～8.0ｍを測る。厚さは0.1～0.4ｍとなる。土師器・須恵器・青磁碗・染付などの遺物の出土をみたが混入したものである。

以下の２層は、第1-A層と第1-B層とした。

第1-A層　青灰（10BG5/1）色砂礫混土と暗青灰色粘質土の２層で構成される。青灰（10BG5/1）色砂礫混土。調査区全域で確認される。標高T.P.＋5.3～5.6ｍ。厚さ0.1～0.2ｍを測る。弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・磁器・陶器など幅の広い時期の遺物が出土している。しかし20世紀になって生産された陶器もあり、これが本層の時期を示すものと思われる。暗青灰色粘質土は、近代以前の耕作土と推定される。全域で検出され、北部では厚さ10cm前後であるが、南部では厚くなり20cm前後を測る。

第1-B層　灰褐（５YR6/2）色土。標高T.P.＋5.2～5.5ｍ。層厚0.1～0.3ｍ。出土遺物の量は多くはないが、須恵器・土師器・黒色土器・瓦器など中世の遺物が出土した。しかし近代に帰属する遺物もあり、これが本層の時期を示すものである。Ｂ区の北部では厚く、４層に細分されるが、南に向かって全体として薄くなりC区へは続かない。

第２層　青灰（5BG4/1）色粘質土。標高T.P.＋5.3～5.6ｍ。層厚01.～0.3ｍ。須恵器・土師器・黒色土器・土師質土器・瓦器・瓦質土器・白磁・陶器など古代から中世の遺物が出土した。

第３層　古代の遺物包含層。灰黄褐(10YR6/2)色粘質土。Ｃ区（05046）を除く調査区全体で確認される。標高T.P.＋5.0から5.4ｍ。南に向かって堆積層は厚くなる。須恵器・土師器が出土した。平安時代に属する遺物が多い。

第４層　古墳時代中期から後期の遺物包含層である。にぶい黄色（10YR5/4）砂質土。遺物量は少ないが、土師器、須恵器が出土した。また弥生土器（後期）・布留式期の土器片も少量であるが検出された。

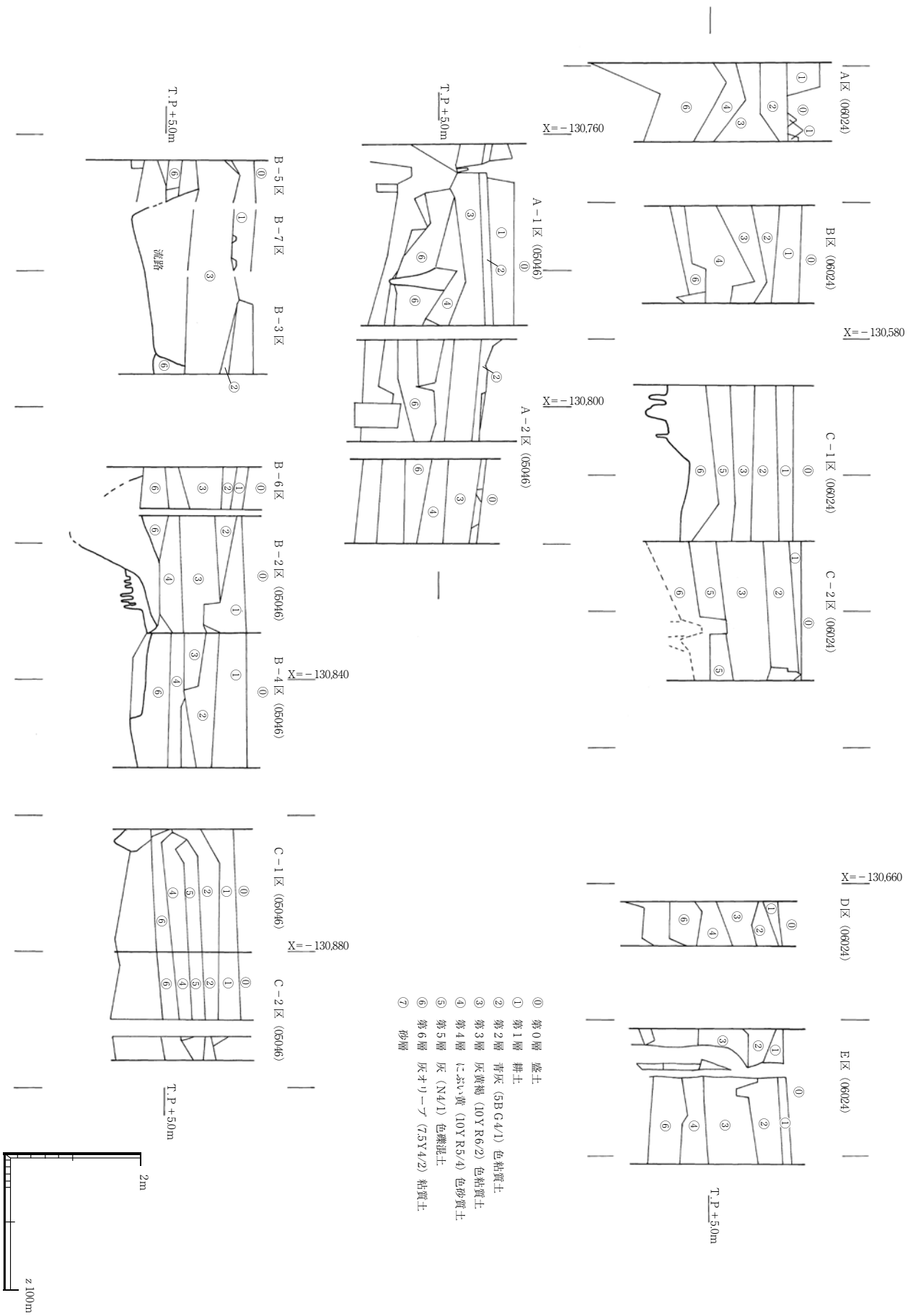


図８　調査区断面模式図（上段（06024）調査区、中・下段（05064）調査区）

第５層　局地的にみられた中世の整地土である。灰（N4/1）色礫混土。C区（05046）で第４層の上層として検出した。標高T.P.＋5.1～5.2ｍ。層厚0.1ｍ。須恵器・土師器・土師質土器・瓦器などが多量に出土した。上面が第１面、下面が第２面。遺構面はC区（05046）内で完結する。砂層を伴わないことから、河川による流水堆積層ではなく人為的な整地層と考えられる。多くの遺物が出土したことから、当該地点の周辺に古代から中世に至る時期の集落のあったことが想定される。

第６層　古墳時代初頭から前期に遺物包含層。灰オリーブ（7.5Y4/2）粘質土とオリーブ褐色粘土の２層で構成される。灰オリーブ（7.5Y4/2）粘質土は河川が深く切り込んでいるＤ・Ｅ区（06024）を除く調査区全域で確認している。しかし面的に確認できたのは下層確認のためのトレンチ調査を実施した、Ａ区（05046）とＢ区（06024）のみである。本層の上層には河川に由来する砂層が20～60㎝の厚さで堆積している。この上面からは遺構が検出された。標高T.P.＋4.5～4.8ｍ。厚さ0.1～0.4ｍ。庄内式～布留式期に属する土器の小片が出土した。オリーブ褐色粘土は、古墳時代前半の包含層である。遺物はＡ区（05046）の北でまとまって出土した。

第２節　遺物包含層出土の遺物

（１）第３層出土遺物

平成17年度（05046）・18年度（06024）の調査においては、基本層序で述べた遺物包含層からその性格と時期を示す遺物が出土している。

１は須恵器の杯蓋である。調整は内外面回転ナデ、つまみ部はナデを施す。復元口径約19㎝で、器高は1.75㎝を測る。色調は灰白（N8/）色を呈し、胎土はわずかに黒色砂粒を含むが密で、焼成は良好堅緻である。２・３は須恵器の高台付杯身である。いずれも内外面の調整は回転ナデを施し、底部はナデを施す。２の色調は灰白（N7/）色を呈し、胎土はわずかに黒色・白色砂粒を含むが密で、焼成は良好堅緻である。色調は灰白（N6/）色を呈し、胎土はわずかに黒色砂粒を含むが密で、焼成は良好堅緻である。４・５は土師器の杯である。４は口縁端部をやや外反させる。口径は反転復元で約15㎝を測る。調整は口縁部内外面ともにヨコナデ、内面ナデ、外面体部下半にハケメ、底部に丁寧なナデを施す。色調は橙（7.5YR7/6）色で、胎土は少量のクサリ礫を含み、焼成は良好である。５は口縁端部を丸く仕上げ、端部すぐ下に沈線が１条めぐる。口径は反転復元で約15㎝を測る。調整は口縁部内外面ともにヨコナデ、内面ナデ、外面体部下半にハケメ、底部に丁寧なナデを施す。色調は灰白（10YR8/2）色で、胎土は少量のチャート・長石・クサリ礫を含み、焼成は良好である。６は緑釉陶器の碗である。内面に緑釉が観察される。調整は内外面、底部ともに回転ナデ、高台部ナデを施す。胎土は密で焼成は良好である。

（２）第４層出土遺物

７は土師器の高杯である。調整は杯部内外面ともにナデ、脚部外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリの後ナデを施す。色調はにぶい黄橙（10YR7/2）色を呈し、胎土中に長石・チャート・クサ

リ礫・石英を多量に含み、焼成は良好である。

（３）第５層出土遺物

８から17は土師器の小皿である。いずれの土器も口径は反転復元である。８から13の土器は口縁端部が内彎する。10は端部に面をもつ。11から13は端部を丸くする。15は口縁端部内面に１条の沈線がめぐる。いずれの土器も底部は不定方向にナデが施されている。色調は灰白（10YR8/1）から浅黄橙（10YR8/3）色を呈し、焼成は良好である。胎土は密であり、長石だけを含むもの、長石・石英を含むものと長石・石英・クサリ礫を含むものがある。鉱物の含有量はいずれも少量である。18から20は黒色土器の椀である。18の口径は反転復元で約15cmである。成形・調整は外面がユビオサエの後ナデ、内面には横方向のヘラミガキが施される。色調は暗灰（N3/）色を呈し、胎土は少量の長石粒を含むが密で、焼成は良好である。19の口径は反転復元で約15cmである。成形・調整は外面がユビオサエの後ナデ、内面にはヘラミガキが施される。

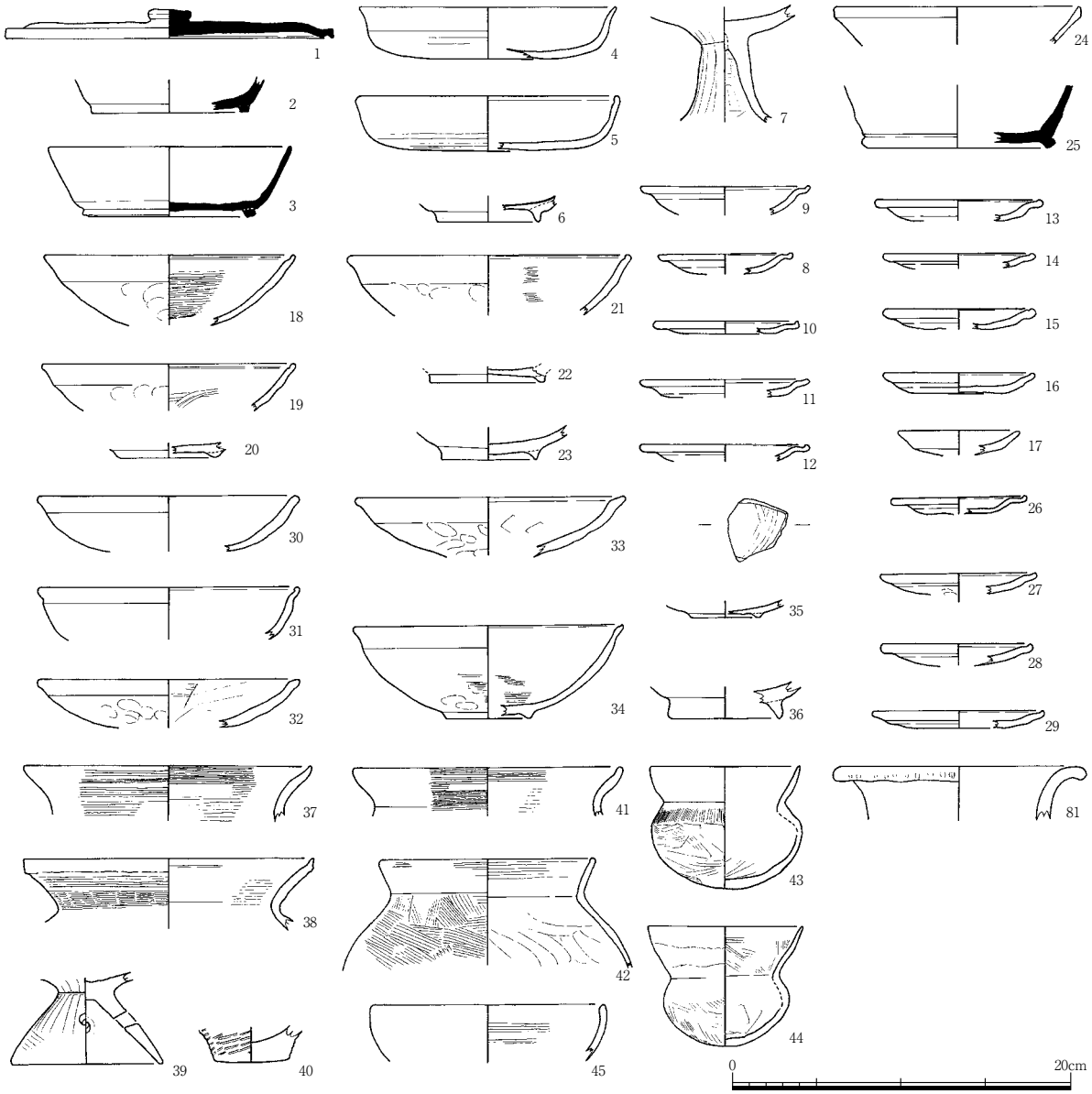


図９　平成17年度（05046）・18年度（06024）調査　出土遺物（１）

色調は灰（N4/）色を呈し、胎土は少量の長石粒を含むが密で、焼成は良好である。20は高台部のみ残存し、反転復元した高台径は約５㎝である。色調は黒（N2/）色を呈し、胎土・焼成は前述２点と同様である。21から23は瓦器椀である。21は反転復元で、口径は約16㎝である。成形・調整は外面がユビオサエの後ナデ、内面には横方向のヘラミガキが施される。色調は灰白（N8/）色を呈し、胎土は少量の長石粒を含むが密で、焼成は良好である。22・23は高台部のみ残存し、22の台部先端はナデで仕上げ、23はユビナデによって台部の先端がやや尖っている。前者の高台径は復元で約７㎝、色調は灰白（10YR8/1）色を呈し、胎土はわずかに長石粒を含むが密で、焼成は良好である。後者は高台径5.5㎝を測り、色調は暗灰（N3/）色を呈し、胎土はわずかに長石粒を含むが密で、焼成は良好である。24は白磁の碗である。反転復元で、口径は約14㎝。色調は灰白（N8/）色を呈し、胎土は密で、焼成は良好である。25は須恵器壺の底部である。成形・調整は体部内外面共に回転ナデ、底部から高台部にかけてはナデを施す。高台径は反転復元で約11㎝である。色調は灰（N6/）色を呈し、胎土は長石をわずかに含むが密で、焼成は堅緻である。26から29は土師器の小皿である。いずれも口縁部をやや内彎させ端部を丸く仕上げる。調整は内外面ともにナデである。口径は反転復元で約８～９㎝を測る。色調は浅黄橙から灰白（7.5YR8/3～10YR8/1）を呈し、胎土はクサリ礫、雲母などを含み、焼成は良好である。29も土師器の小皿であるが前３点よりやや口径が大きく、復元口径約10㎝をはかる。調整・色調・胎土・焼成はそれらと同様である。32・33は土師器の皿である。32の口径は反転復元で約15㎝を測り、調整は口縁部ヨコナデ、内面ハケの後ナデ、外面ユビオサエの後ナデを施す。色調は灰（10YR7/1）色を呈し、胎土はクサリ礫、長石を含む、焼成は良好である。33の口径は反転復元で約16㎝を測り、調整は口縁部ヨコナデ、内面ハケの後ナデ、外面ユビオサエの後ナデを施す。色調は黒褐（10YR3/1）色を呈し、胎土は石英、チャート、長石を含む、焼成は良好である。30は土師器椀、

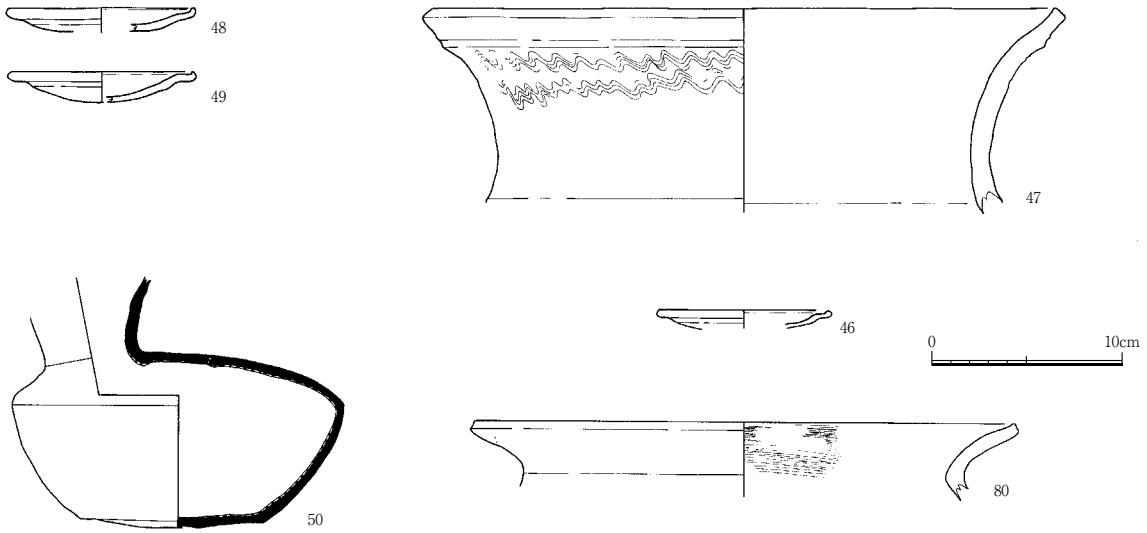


図10　平成17年度（05046）・18年度（06024）調査　出土遺物（２）

31は土師器杯である。34・35は瓦器椀である。34の口径は反転復元で約16㎝、器高5.5㎝、復元高台径約５㎝を測る。口縁端部をやや外反させ、端部内側に窪みをもつ。調整は口縁部内外面共にヨコナデ、外面体部上半ヘラミガキ、下半にユビオサエ、高台部ヨコナデ、底部にナデを施し、内面はヘラミガキが確認される。色調は暗灰（N3/）色を呈し、胎土は灰・白色砂粒を少量含むが密で、焼成は良好である。35は内面にヘラミガキが確認される。色調は灰白（2.5Y7/1）色を呈し、胎土はチャート・クサリ礫を少量含むが密で、焼成は良好である。36は白磁の碗の高台部である。釉薬は内面に少量付着しているのみである。胎土は密で焼成は良好である。83・84は瓦器椀の高台部である。

（４）第６層出土遺物

37・38は土師器の甕である。37は口縁端部を若干つまみ上げ端部を丸く収める。復元口径は約17㎝である。調整は端部内外面ともにヨコナデ、口縁部内外面ともにハケメを施す。色調は黄灰（2.5Y5/1）を呈し、胎土中に雲母が確認されるが少量であり、焼成は良好である。38は口縁端部をつまみ上げる。端部外面は面をもち、下端にやや強めのナデが施される。復元口径は約17㎝である。調整は端部内外面ともにヨコナデ、口縁部内外面ともにナデ、体部内面はナデが施されている。色調は浅黄橙（10YR8/3）を呈し、胎土中に長石・チャート・クサリ礫が確認されるが少量であり、焼成は良好である。39は小型器台の脚部である。復元底径約９㎝を測る。調整は外面にヘラミガキ、内面にナデが施される。色調は灰黄（2.5Y7/2）色を呈し、胎土中に長石、チャートを含み、焼成は良好である。４方向の円形透かしをもつ。40は弥生土器の甕の底部である。外面にタタキ成形が確認され、内面調整はハケメ、底部はナデを施す。体部内外面ともに煤が付着する。色調は褐灰（10YR4/1）色を呈し、胎土中にチャート・長石・クサリ礫を含み、焼成は良好である。41・42は土師器の甕である。41の復元口径は約16㎝を測る。口縁部はやや内彎させ端部はヨコナデで仕上げる。調整は内外面ともにハケメを施す。色調は橙（7.5YR7/6）色を呈し、胎土中に雲母・長石・クサリ礫を含み、焼成は良好である。42は土師器の甕で、復元口径約13㎝である。口縁端部は内側に丸く肥厚する。調整は口縁部内外面共にハケメ＋ナデ、肩部内面ヨコナデ、体部外面ハケメ、内面ナデを施す。色調はにぶい黄橙（10YR6/3）色を呈し、胎土中にチャート・長石・クサリ礫を含み、焼成は良好である。43・44は土師器の小型丸底壺である。

43の復元口径は約９㎝、器高は7.2㎝を測る。口縁部の調整は内外面ともにヨコナデ、外面肩部は縦方向のハケメ、体部はハケ状工具によるナデ、内面はハケの後ナデを施す。外面体部に煤が付着する。色調は灰白（2.5Y7/1）色を呈し、胎土中にチャート・長石・クサリ礫・雲母を含み、焼成は良好である。44の復元口径は約９㎝、器高は7.05㎝を測る。口縁部の調整は内外面ともにヨコナデ、外面はハケメ、内面肩部はナデ、体部はハケの後ナデを施す。外面体部に煤が付着する。色調は黄灰（2.5Y5/1）色を呈し、胎土中にチャート・石英を含みやや粗く、焼成は良好である。45は土師器の鉢である。復元口径は約14㎝を測る。調整は口縁部内外面ともにヨコナデ、

体部外面ナデ、内面ハケメを施す。色調はにぶい橙（7.5YR7/3）色を呈し、胎土中に長石・クサリ礫を含み、焼成は良好である。81は弥生土器壺で、口縁部は外彎しながら外上方にのび、端部は丸く収める。口縁端部外面にキザミ目を巡らす。調整は口縁部内外面にヨコナデを施す。復元口径は14.0㎝、色調は灰白（2.5Y8/2）色を呈する。胎土中には長石、チャートを含み、焼成は良好である。

第３節　検出遺構

平成17年度（05046）・18年度（06024）の調査区においても一層ごとに精査・遺構検出に努めた。遺構が検出された調査区について記述する。

（１）Ｃ－１・２区（05046）第５層上面

第３層上面でも溝や土坑などの遺構が検出されているが、第５層上面の遺構は密度高く存在していた。ここでは溝・土坑・小穴が検出された（図11～14）。出土遺物から判断して、時期は中世以降である（図10）。

遺構13　直径約0.4ｍ、深さ約0.1ｍを測り、平面形は円を呈する小穴である。断面形は碗形で、埋土は青灰色砂混粘質土である。土師器の小皿46が出土した。46は口縁部が内彎し、端部は丸くおさめる。色調は灰白（10YR8/1）で、胎土中にクサリ礫を含み、焼成は良好である。

遺構10　長軸0.65ｍ、短軸0.48ｍ、深さ0.22ｍを測り、平面形は長円を呈する。埋土は２層に分かれ、上層が緑灰（5G5/1）礫混粘質土、下層は上層と同様の色調で礫を含まず微砂混土である。上層から須恵器の甕47が出土した。47の復元口径は約33㎝である。調整は内外面ともに回転ナデを施し、外面頸部に灰かぶりが確認される。波状紋は４本一組の工具で２段に施されている。色調は灰（N5/）を呈し、胎土中に白・黒色砂粒を含み、焼成は良好である。

遺構８　東延長は調査区外なので、溝なのか土坑なのかは不明。検出長0.4m、幅0.38ｍ、深さ0.3ｍを測る。断面形は浅い皿形で、埋土は灰（N6/）色土１層である。埋土中から土師器小皿48・49などが出土した。48の復元口径は約10㎝を測り、口縁部をやや内彎させ、端部は丸く仕上げる。調整は口縁部内外面ともにヨコナデで、体部は内外面ともにナデである。色調は灰白（7.5YR8/2）を呈し、胎土中にわずかのクサリ礫を含む。焼成は良好である。49の復元口径は約10㎝を測り、口縁部は水平方向に折り曲げた口縁端部をつまみ上げて仕上げる。調整は口縁部内外面ともにヨコナデで、体部は内外面ともにナデである。色調はにぶい橙（10YR6/2）を呈し、胎土中にわずかのクサリ礫・長石を含む。焼成は良好である。

遺構26　遺構23と24の間で検出された、直径約0.2ｍ、深さ約0.2mを測り、平面形は円形を呈する小穴である。須恵器の平瓶50が出土した（T.P.+5.28ｍ）。50の調整は内外面とも回転ナデ、底部はナデとオサエが施される。外面上半に灰かぶりが観察される。

遺構５　直径約0.6㎝を測り、平面形はほぼ円形の小穴である。深さは0.08ｍで、断面形は浅い皿形を呈する。

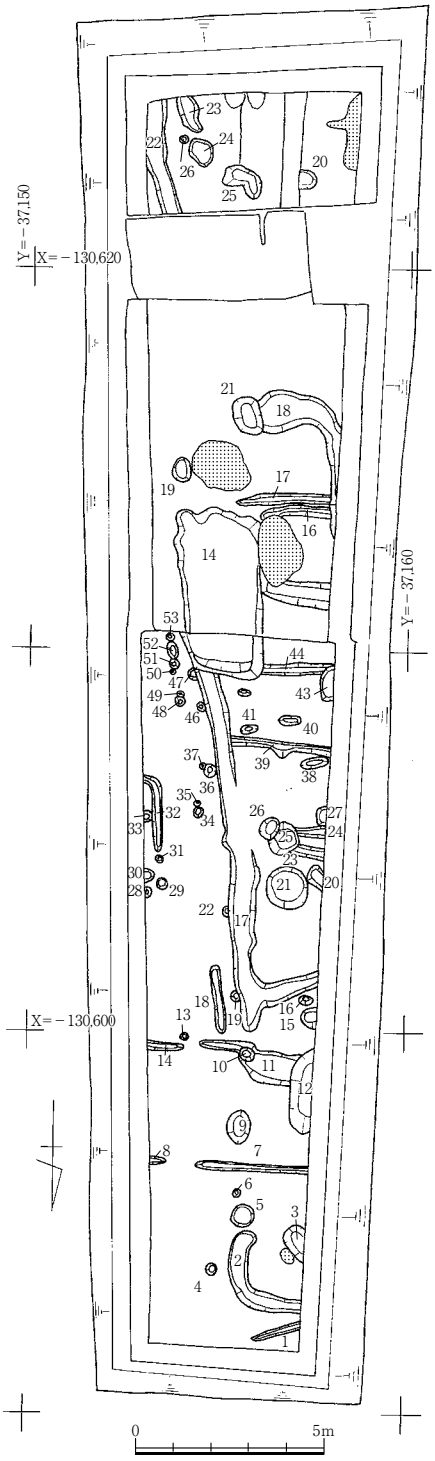


図11　C－1・2区（05046）遺構全体図

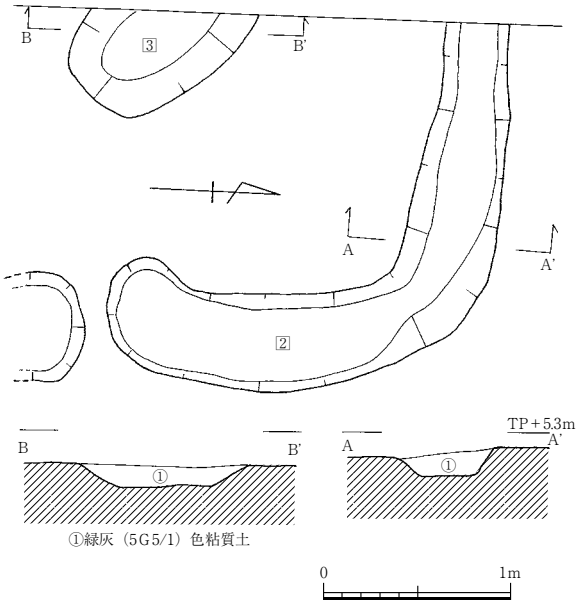


図12　遺構2・3　平・断面図

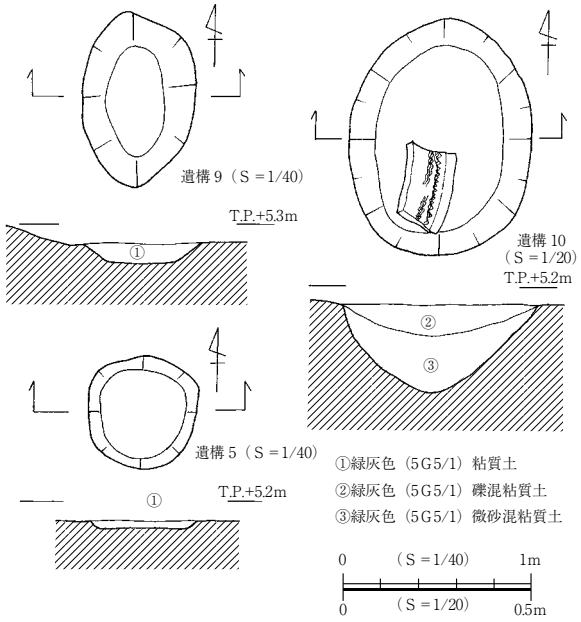


図13　遺構5・9・10　平・断面図

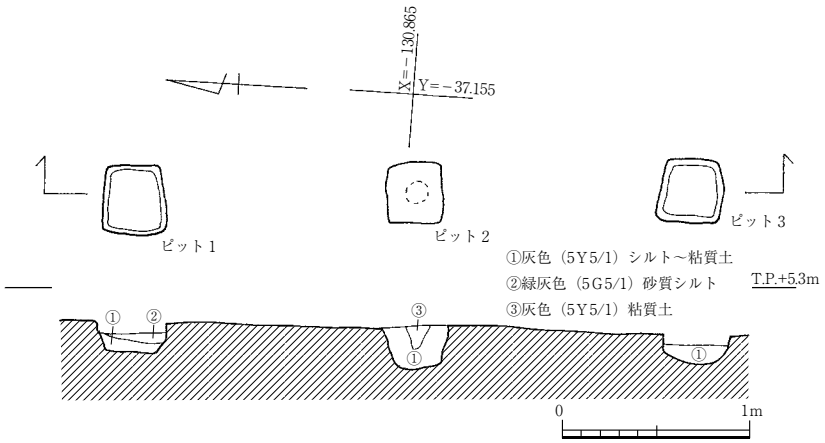


図14　C－1区（05046）第4層下面検出遺構　平・断面図

遺構９　長軸0.9ｍ、短軸0.6ｍを測り、平面形は長円の土坑である。深さは0.1ｍで、断面形は皿形を呈する。

遺構２　西側は調査区外である。東西に約1.3ｍ延び、そこから南にほぼ直角に屈曲し1.5ｍ分を検出した溝である。深さは0.1～0.15ｍを測り、埋土は緑灰（5G5/1）である。土師器の破片が出土した。

遺構14　幅約0.3ｍを測る溝である。80は土師器甕で、口縁部が外上方に大きく開き、口縁端部は面をなす。調整は口縁部外面にナデ､内面にハケメを施す。器壁は比較的厚い。内面にススが付着する。復元口径は28.5㎝、色調はにぶい橙（7.5YR7/4）色を呈する。胎土中には長石、雲母を含み、焼成は良好である。

遺構17　西側はいずれも調査区外である。東へ約４ｍ伸び、ほぼ直角に屈曲し13ｍ伸び、再びほぼ直角に屈曲し西へ延びる。南北方向に伸びる溝は屈曲する部分とそのまま伸びている部分（約１ｍ）が確認されており、この溝がなんらかの区画の意味があったと推定した上で、区画範囲を拡大した可能性も考えられる。埋土の類似性から、遺構２の溝まで拡大された可能性も指摘しうる。深さは0.05～0.15ｍを測り、埋土は遺構２と同様である（図15）。

（２）Ｃ－１区（05046）第４層下面

方形のピットを３基検出した（図14）。調査区の南側にピットは延びないが、他は調査区外となるため、建物の規模等は復元できない。柱間寸法は2.1～2.2ｍ、

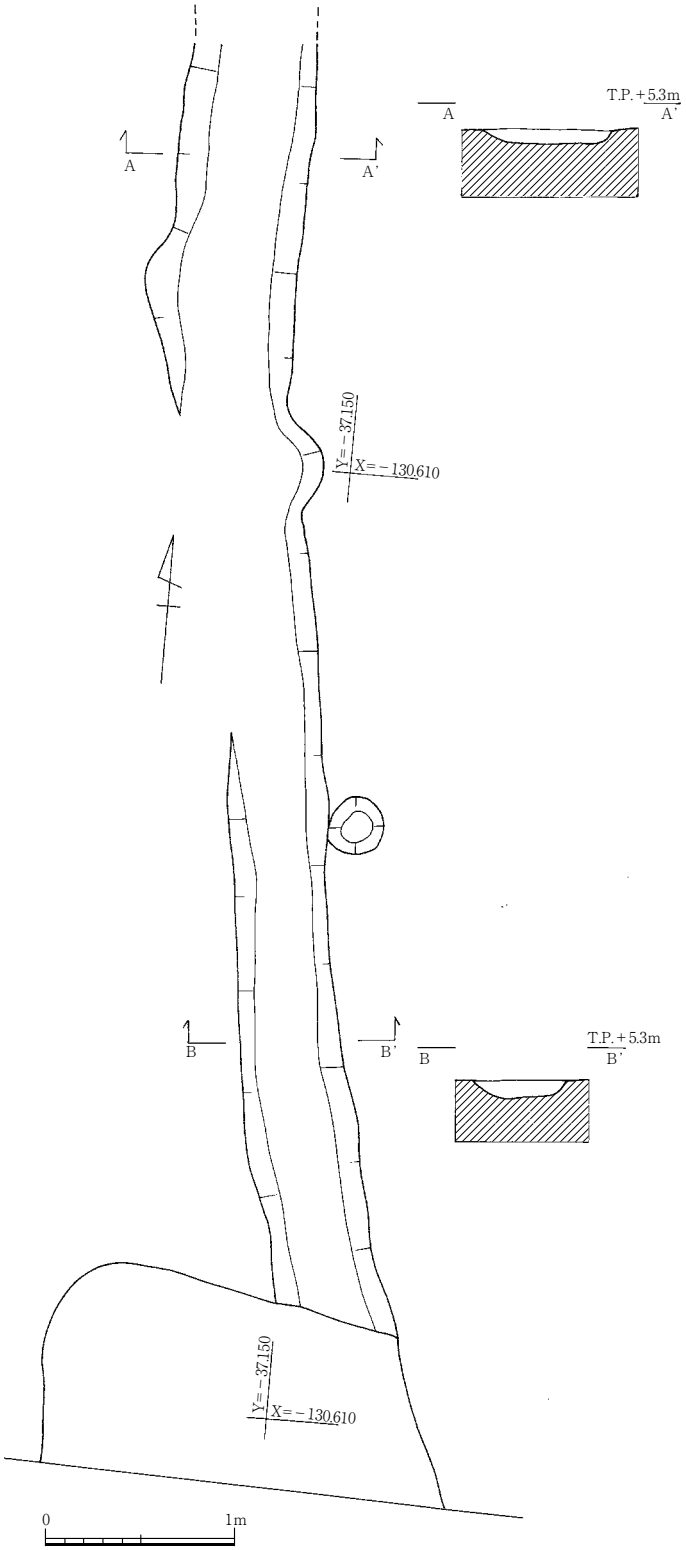


図15　遺構17　平・断面図

主軸はほぼ南北である。いずれのピットも１辺約0.5ｍの方形である。ピット１の埋土は２層に分層され上層が緑灰（5G5/1）色砂質シルト、下層が灰（5Y5/1）色シルトから粘質土で、柱痕は検出されなかった。ピット２は直径約0.2ｍの柱痕跡が確認された。埋土は１の下層と同じである。ピット３の柱痕は検出されなかった。埋土は１の下層と同様である。遺物の出土はなかった。上層、下層遺物から判断して平安時代に属する遺構面である。

（３）Ｂ・Ｃ区（06024）第６層上面

面的に調査したのはＣ区（06024）のみである。畦畔が検出された。検出延長は約5.7ｍ、高さは約0.12ｍである。主軸方向はE-19°-Nである。Ｂ区（06024）でも下層確認を実施した際に、断面観察において同位層での畦畔を確認した。その畦畔を西壁と東壁で結んだ主軸方向はE-5°-Nである（図16）。

その他の調査区では同位層での畦畔は確認できなかったが、断面観察によって多数の足跡が検出された。

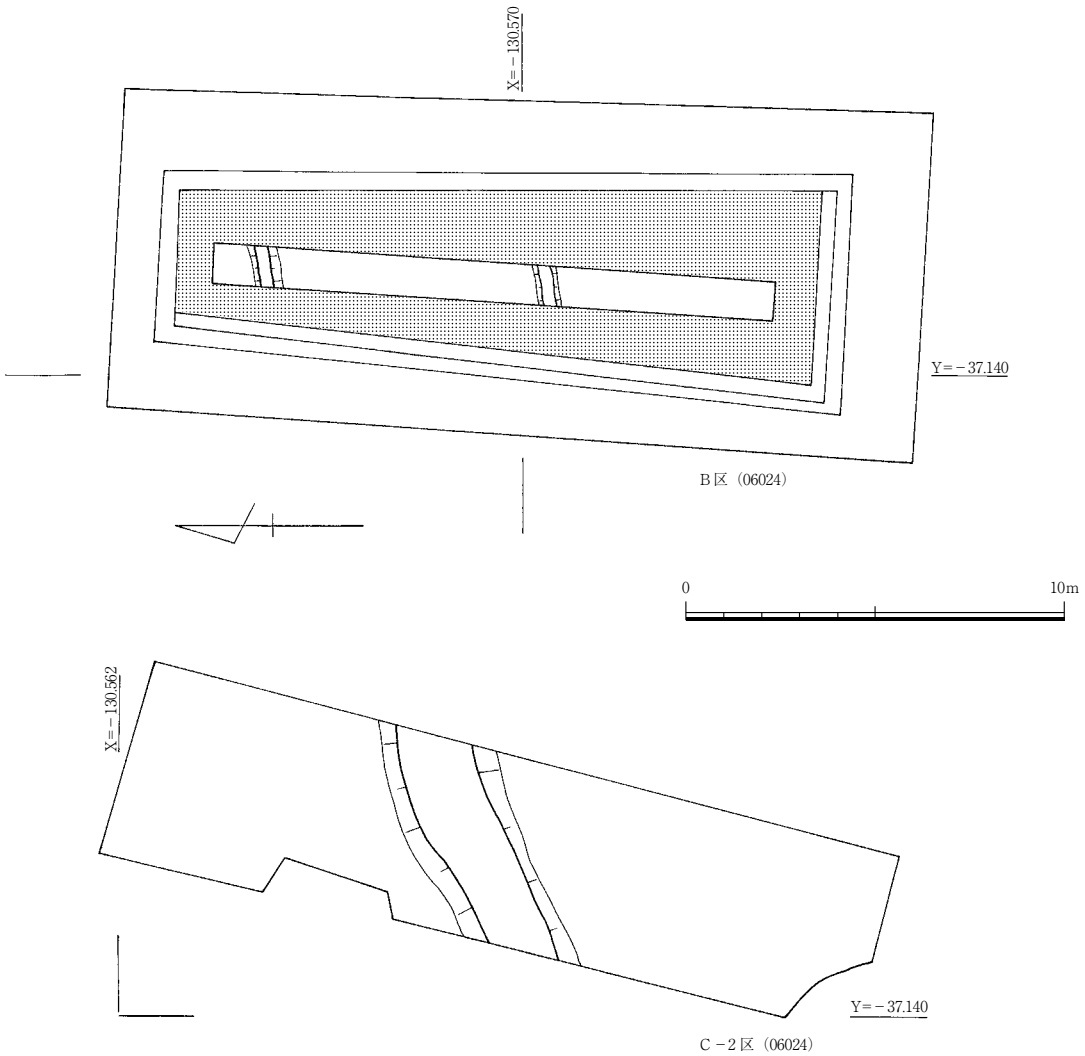


図16　Ｂ区・Ｃ－２区（06024）畦畔検出状況

第４節　Ｂ区（07028）の調査

平成19年度（07028）調査を実施した。当該地点は、Ｅ区（05046）とＡ区（06024）に隣接する地点である。平成17年度（05046）・平成18年度（06024）の調査では、細長い調査範囲を分割して、同時に複数の離れた場所のトレンチの調査を実施することが必要であった。これに対して、本地点では短期間ではあったが１ヶ所の調査区を集中的に調査を実施することが可能であり、遺物の出土状況など詳細に観察することが可能であった。

（１）基本層序と検出遺構

基本的な層序は、現代の整地土および二つの旧耕作土層（第１層、第２層）の下に大きく四つの層を確認した。

第３層および第４層は土壌の観察と溝が検出されたことなどから耕作土層と判断できる。第３層の時期は、瓦器椀や土師皿、陶磁器片などの出土遺物が示す時期から中世に属すると考えられる。第４層の出土遺物も第３層と同じ様相であるが、黒色土器や須恵器片など平安時代の遺物もわずかに含む。第５層は、砂質土に粗砂や小礫が混在するうえ、シルト層が斜堆積している状況が認められることから、河川氾濫等の影響による堆積と考えられる。第６層は、古墳時代の土師器片などが出土している。調査区の南西隅では木杭と思われる木材が出土した。近隣の調査区の所見を合わせれば、この土層は水田層とみてよいであろう。

なお、平成17年度（05046）・平成18年度（06024）の調査において確認した土層との対応関係は、本調査区の第３層が（05046）（06024）調査区の第２層である。以下、第４層が第３層に、第５層が第３層に、第６層が第６層に対応する。

第４層上面で溝３条を検出した。いずれも南北方向の溝で、幅0.8～1.1ｍ、深さ0.1～0.2ｍ程度の規模である。溝埋土からは樟葉型などの瓦器椀片や中世の土師器片が多く出土しており、他時期の遺物は認められない。中世に属する溝であろう。なお、３条の溝の間隔は、それぞれ約4.2ｍ、約11.8ｍであり、均一ではない。また、一部で畦畔状の高まりも確認

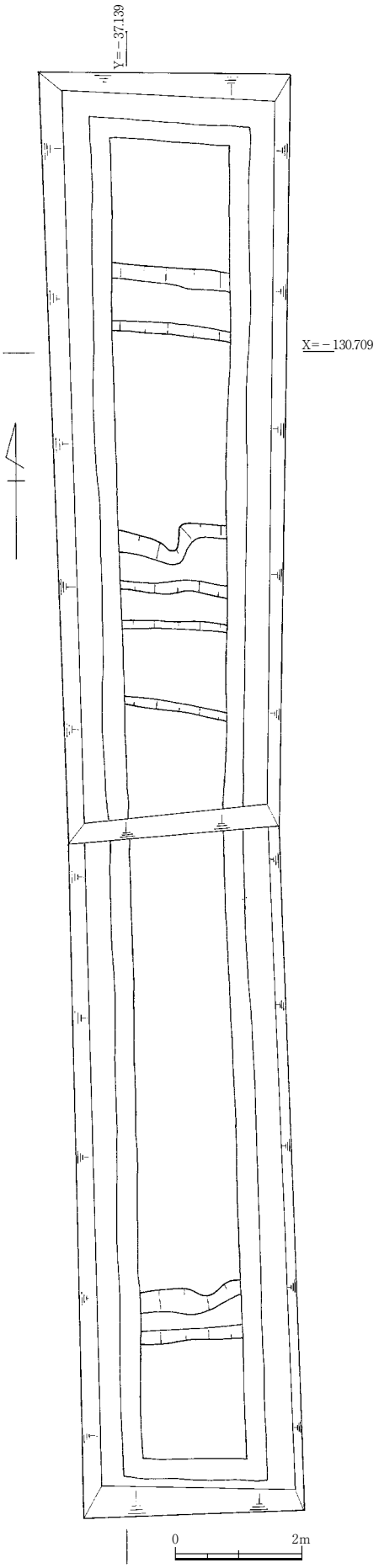


図17　Ｂ区（07028）第４層上面遺構平面図

できた（図17）。

（２）出土遺物

本調査区でも土層や遺構の時期を推測させる遺物が出土している（図18）。

第３層　51～60は須恵器である。51～53は杯蓋で、51のつまみ部調整は外面回転ナデ、内面ナデを施す。つまみ部径2.8㎝、色調は灰白（N7/）色を呈する。52・53はかえりをもつ蓋で、調整は内外面に回転ナデを施す。53の復元口径は12.0㎝である。色調は52が灰白（N7/）色、53が灰白（N8/）色を呈する。胎土は51・52に小石を含むが、３点とも全体に密で、焼成は良好堅緻である。

54～56は高台付杯身で、調整は杯部内外面に回転ナデ、底部内外面に不定方向ナデを施す。高台部復元径は54が12.3㎝、55が11.0㎝、56が8.9㎝を測る。色調は54が灰白（N7/）色、55が灰（N6/）色、56が灰白（N8/）色を呈する。胎土は54に一部小石が含まれるが、３点共に密で、焼成は良好堅緻である。

57・59・60は甕口縁部である。口頸部は外彎してのび、内側に屈曲して口縁端部にいたる。調整は内外面に回転ナデを施す。復元口径は57が22.0㎝、59が29.0㎝、60が32.0㎝を測る。色調は57が灰白（N7/）色で、その上に内外面共に自然釉が付着し、59が灰（N6/）色、60が明褐灰（5YR7/1）色を呈する。胎土は57・59にわずかに黒色砂粒が含まれるが、全体に密である。焼成は良好堅緻である。

58は壺口縁部で、やや外傾しながらまっすぐに立ち上がり、端部は面をなす。調整は内外面に回転ナデを施す。復元口径は16.0㎝、色調は灰白（N7/）色、胎土は密、焼成は良好堅緻である。

61は白磁碗で、復元口径は15.6㎝、色調は断面部が灰白（N8/）色、内外面に施された釉薬は灰白（5Y7/1）色を呈する。胎土は密で、焼成は良好である。

62は瓦器椀で、内面に一部暗文が残る。外面はユビオサエの後、口縁部にヨコナデを施す。復元口径は15.4㎝、色調は灰（N4/）色、胎土は密、焼成は良好である。

63・64は土師器甕である。63は内彎する体部から外上方に口縁部がのびる。口縁端部は丸く収まる。調整は口縁部外面にヨコナデを施す。復元口径は14.6㎝、色調は灰黄褐（10YR5/2）色からにぶい黄橙（10YR7/3）色を呈する。胎土中には長石、雲母を含み、焼成はやや不良である。64は口縁部が大きく開き、口縁端部をつまみ上げる。器壁は厚い。調整は内外面にヨコナデを施し、外面にはススが付着する。復元口径28.0㎝、色調は黄橙（10YR7/2）色、胎土は長石、雲母を含み、焼成は良好である。

65は土師器羽釜で、鍔部はほぼ水平に張り出す。外面調整は鍔部にヨコナデ、体部にハケを施す。鍔部復元径は27.2㎝、色調は灰白（10YR8/2）色、胎土は長石、雲母、クサリ礫を含み、やや粗い。焼成は良好である。

82は瓦質足釜の足部で、縦方向のナデで調整している。足部残存長は7.2㎝、断面は不定形な楕円形を呈し、上方部では長径2.3㎝×短径1.9㎝を測る。色調は外側では黒（10Y2/1）色、内

側では灰黄（2.5Y7/2）色を呈する。胎土中に長石を含むが、密で、焼成は良好である。

第４層　66・67は須恵器である。66は壺口縁部で、外傾して開き端部は面をなす。調整は内外面に回転ナデを施す。復元口径は19.0㎝、色調は灰（N6/）色、胎土は密で、焼成は良好堅緻である。67は甕口縁部で、外面に７本以上を１組とする波状紋が施される。調整は内外面に回転ナデ、色調は灰（N6/）色を呈し、胎土は白・黒砂粒を含み、焼成は良好堅緻である。

68は白磁皿で体部は内彎して口縁部にいたる。復元口径は8.0㎝で、色調は露胎部と釉薬は同色で灰白（5Y8/1）色を呈する。胎土は密、焼成は良好である。

69は土師器の浅い小皿で、調整は口縁部内外面にヨコナデ、体部内面には一部ハケメが残る。復元口径は9.2㎝、色調は灰白（2.5Y8/1）色、胎土は密で、焼成は良好である。

70は瓦器椀で器壁は薄い。調整は内外面にヨコナデを施す。色調は灰（N4/）色を呈し、胎土は密、焼成は良好である。

第５層　73は須恵器杯蓋で、内外面は回転ナデで調整する。復元口径は15.0㎝、色調は灰（N6/）色を呈し、胎土は密、焼成は良好堅緻である。

74は土師器甕で、内彎気味に外下方に広がる体部と外上方にのびる口縁部からなる。口縁端

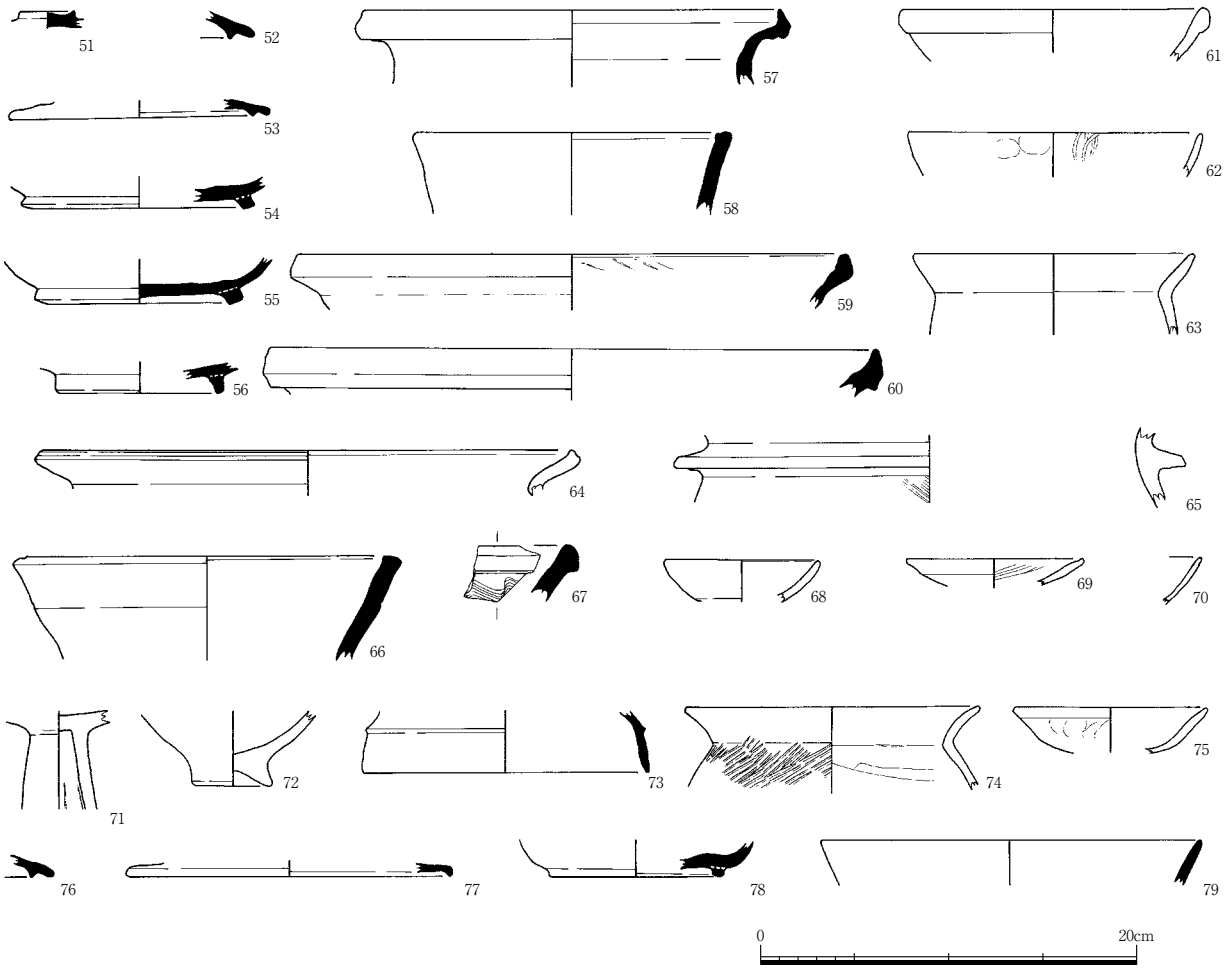


図18　平成19年度（07028）調査　Ｂ区出土遺物

部は丸く収まる。調整は体部外面にタタキ、内面は工具ナデを施す。口縁部外面はヨコナデ、内面は磨耗のため不明瞭であるがナデとみられる。復元口径は15.4㎝を測る。色調は淡赤橙（2.5YR7/4）色から褐灰（10YR6/1）色を呈する。内外面に一部ススが付着する。胎土は長石、石英、クサリ礫、雲母を含み、やや粗い。焼成は良好である。

75は土師器小皿である。体部は外上方に広がり、口縁端部は丸く収まる。調整は体部外面にユビオサエ、口縁部外面にヨコナデ、内面にはナデが施される。復元口径は10.0㎝、色調は浅黄橙（7.5YR8/3）色を呈する。胎土はクサリ礫、雲母を含むが密で、焼成は良好である。

第５層中に存在したピット状の落ち込みから須恵器片が出土している。76～79は須恵器である。76・77は杯蓋で、76はかえりをもち、77は口縁端部を短く下方に屈曲させる。調整は共に内外面に回転ナデを施す。77の復元口径は17.0㎝を測る。色調は76が灰白（N7/）色、77が灰（N6/）色を呈する。胎土は密で、焼成は良好堅緻である。

78・79は杯身である。78は底端部近くに高台を貼り付ける。調整は内外面に回転ナデ、内底面に一部不定方向ナデを施す。復元高台径は9.2㎝、高台高は0.4㎝を測る。色調は灰白（N7/）色で、胎土は密、焼成はやや不良である。79は口縁部の小片である。調整は内外面に回転ナデ、復元口径は20.0㎝、色調は灰白（N7/）色、胎土は密で、焼成は良好堅緻である。

第６層　71・72は土師器である。71は高杯で、杯底部に外下方に広がる脚部を貼り付ける。器壁は全体に厚い。調整は脚部内面に粗いヘラケズリが施されている。脚部基部径は3.1㎝を測る。色調は橙（7.5YR7/6）色、胎土は長石、石英、クサリ礫を含み、やや粗い。焼成は良好である。72は鉢で、外上方に広がる体部と底面が内彎する台部からなる。器壁は比較的厚い。調整は台部外面にユビオサエの後ナデが残る。底径は3.8㎝、色調はにぶい橙（7.5YR7/4）色を呈し、胎土は長石、石英、クサリ礫を含み、やや粗い。焼成は良好である。

第５節　Ａ区（09040）の調査

平成21年度は１ヶ所の調査を実施した。限定された調査条件から狭小な調査区が設定できたのみである。

基本的な層序は、厚さ約２ｍの第１層・現代盛土の下に旧耕作土である第２層・黒灰色シルト（厚さ約0.2ｍ）が見られた。以下、第３層・青灰色シルト（厚さ約0.15ｍ）、第４層・淡褐色シルト（厚さ約0.45ｍ）、第５層・暗灰色シルト（厚さ約0.3ｍ）、第６層・黒灰色粗砂（厚さ約0.05ｍ）、第７層・黒灰色粘土（厚さ0.2ｍ以上）が確認できた。第３層において土師器片が出土したが、他に遺構・遺物は検出されなかった。

当該調査区における土層の堆積状況は、Ｂ区（07028）の調査成果と、さらには今回の鮎川・ミクリ遺跡の発掘調査成果と整合している。

第３層は中世、第４層は平安時代の耕作土の相当し、第５層は河川氾濫による流水堆積の影響を受けた土層、第６層が水田の耕作土層であると推測される。

第４章　まとめ

今回の鮎川遺跡・ミクリ遺跡における発掘調査は、全長約350ｍの範囲に細長いトレンチを南北に設置することとなった。その結果、遺跡を横断するように土層の堆積状況を体系的に把握することができ、この地域における開発の歩みをたどることができた。

最下部に弥生時代の流水堆積層が存在しており、この時期には規模の大きな河川とそれが形成した砂洲状の環境が復元できる。古墳時代の初め頃にはその上部に粘土層が形成され、その上面では水田の畦畔が検出されている。古墳時代にはこの地域の一部で耕作地の造成が行われたことが推測される。

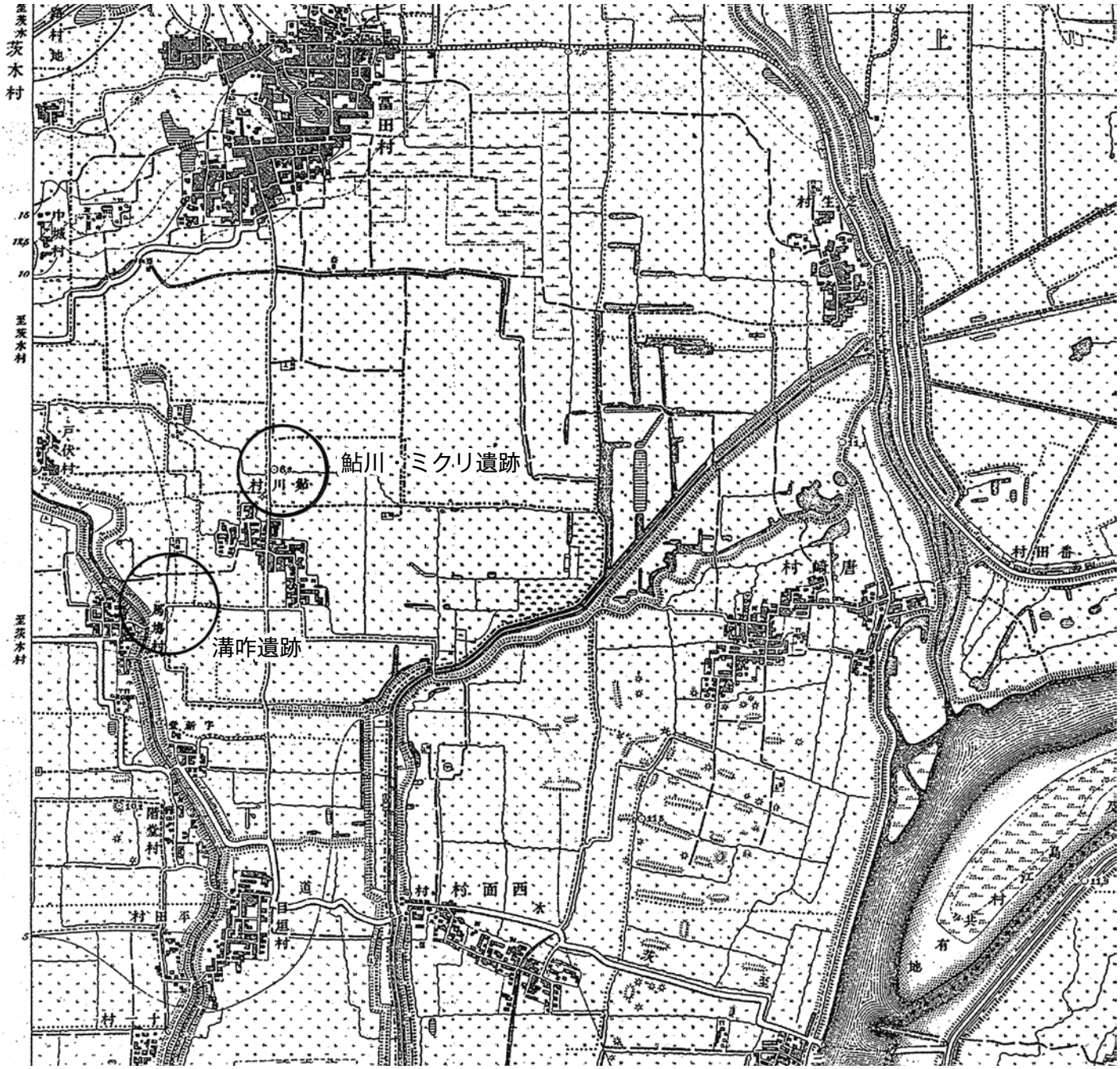


図19　鮎川・ミクリ遺跡と溝咋遺跡（明治18年測量仮製２万分の１地形図「枚方」より）

奈良・平安時代には部分的に自然河川の跡が検出され、再度不安定な状況になる。しかし中世以降にはこの地区全体に客土による盛土が施されて、広く耕作地が広がっていたと考えられる。客土された土砂には、平安時代と鎌倉時代の遺物が比較的集中して出土する部分があり、調査区の近辺に当該時期の集落跡などの遺跡の存在が予想される。一連の発掘調査で検出された遺構はさほど多くないが、鮎川遺跡に当たる南部地区では中世に比定される土坑などが存在しており、その片鱗をうかがうことができる。

鮎川遺跡とミクリ遺跡にまたがる当該地区において、これまで発掘調査の事例が少なく、その歴史的な変遷は明らかでなかった。今回の調査において土地利用の変遷を考える上での基本的な情報をえることができた。今後、安威川流域の歴史を考える上での重要な成果である。

報　告　書　抄　録

ふりがな	あゆかわ・みくりいせき
書名	鮎川・ミクリ遺跡
副書名	都市計画道路富田奈佐原線整備事業に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	２０１０－４
編著者名	井西貴子・小浜 成・小林義孝・林日佐子
編集機関	大阪府教育委員会
所在地	〒540－8571　大阪府大阪市中央区大手前２丁目　TEL06－6941－0351（代表）
発行年月日	平成23年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	面積(㎡)	調査原因
鮎川（あゆかわ）・ミクリ（みくり）遺跡（いせき）	茨木（いばらき）市鮎川（しあゆかわ）～ 高槻（たかつき）市西町（しにしまち）	27211 27207	95 185	34° 49′ 15″	135° 35′ 38″	平成17年～ 平成19年、 平成21年	約1500㎡	都市計画道路 富田奈佐原線 整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鮎川（あゆかわ）・ミクリ（みくり）遺跡（いせき）	水田跡	古墳時代後期	畦畔	須恵器・土師器	
	集落跡	古代～中世	溝 小穴	須恵器・瓦器	

要　約	古墳時代	古墳時代初頭から前期の水田跡を検出。弥生時代には河川堆積である砂層が形成され、古墳時代以降、この砂層上が開発される。
	古代～中世	溝・柱穴を検出し、集落周辺の耕作地として利用。

図　　版

鮎川・ミクリ遺跡全景（北西から）

鮎川・ミクリ遺跡全景（南から）

平成17年度（05046）調査区全景（南から）

平成17年度（05046）調査区全景（上空から）

図版3　調査区全景

A－1区（05046）付近

B－2区（05046）付近

C－1区（05046）第5層上面検出遺構

C－1区（05046）第4層下面検出遺構

Ｃ－２区（05046）検出遺構

Ｃ－２区（05046）遺構26出土遺物

図版6　調査区全景

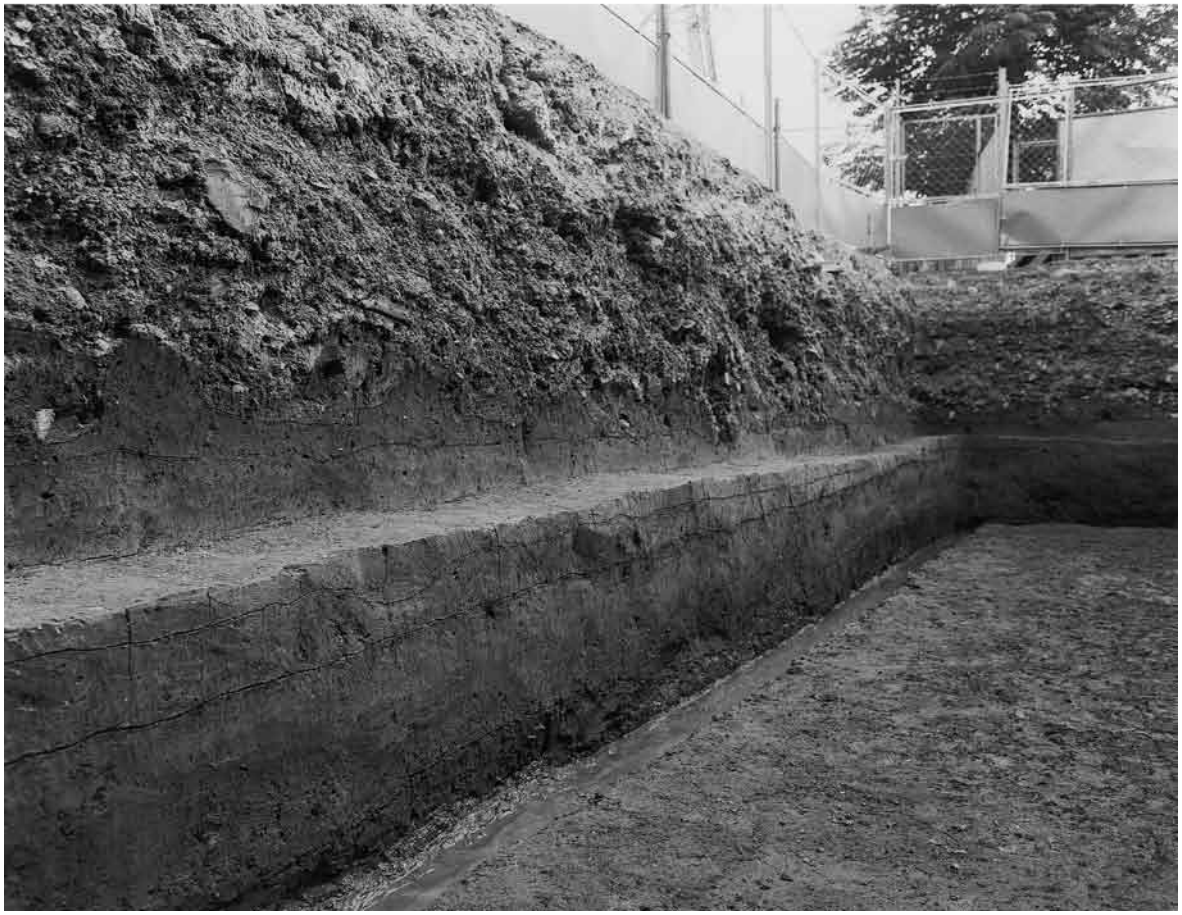
B区（06024）

B－5区（05046）

C－2区（06024）畦畔検出状況

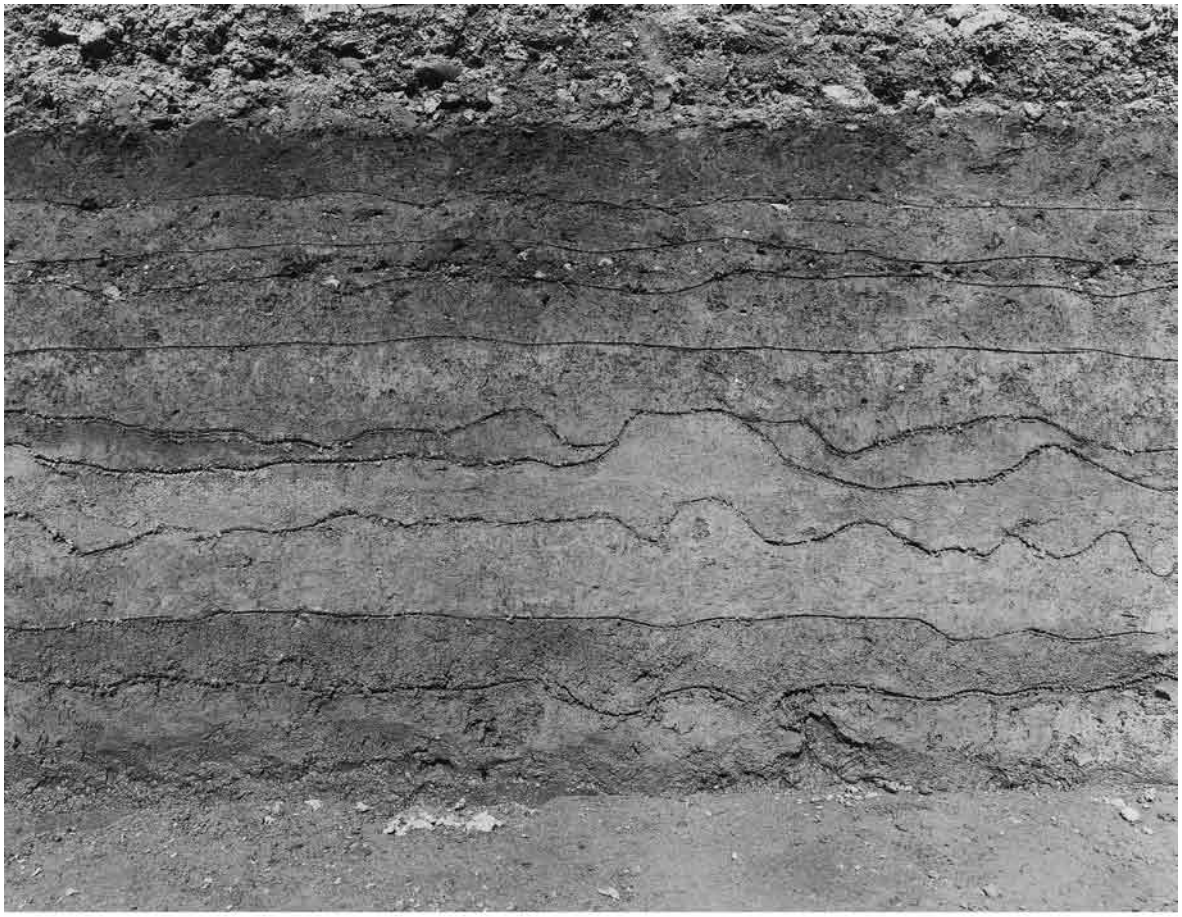
A区（09040）

B区（07028）第４層上面検出遺構

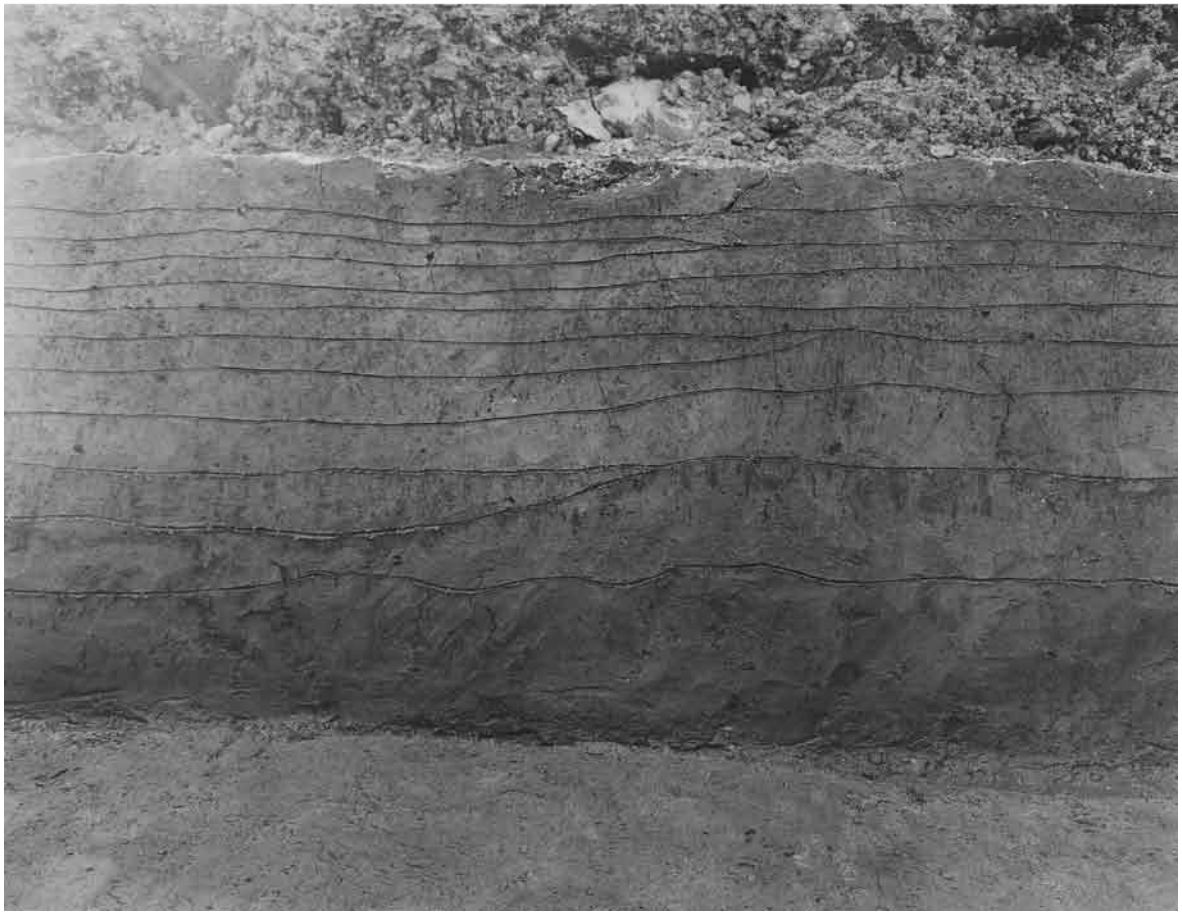


B区（07028）断面

図版8　土層断面



A区（06024）断面



D区（06024）断面

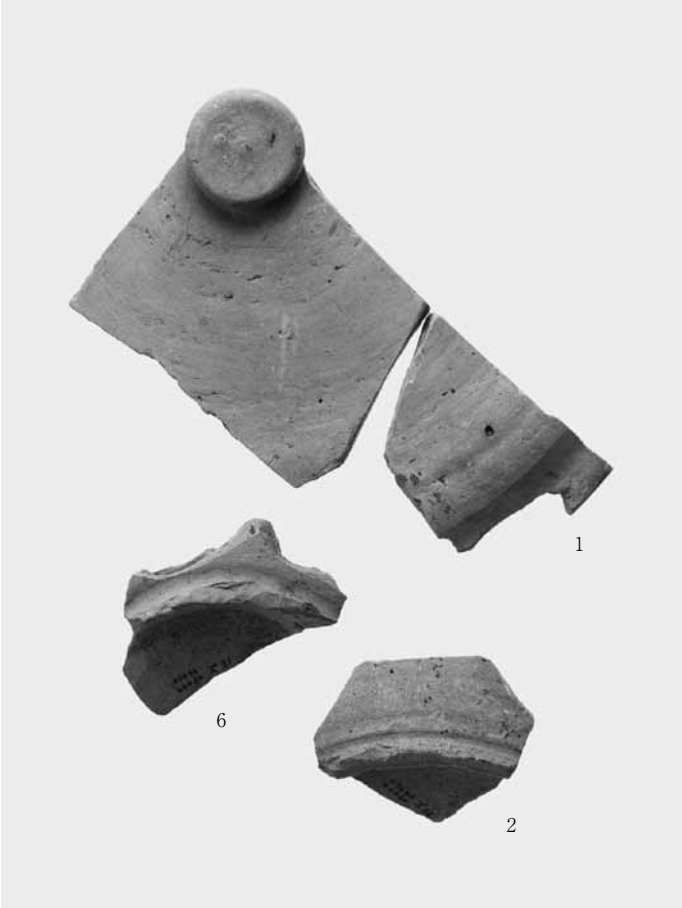
44

43

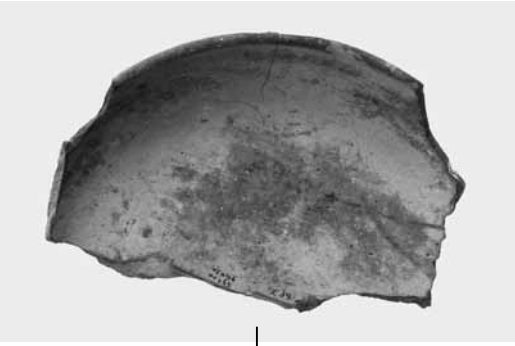
7

3

50

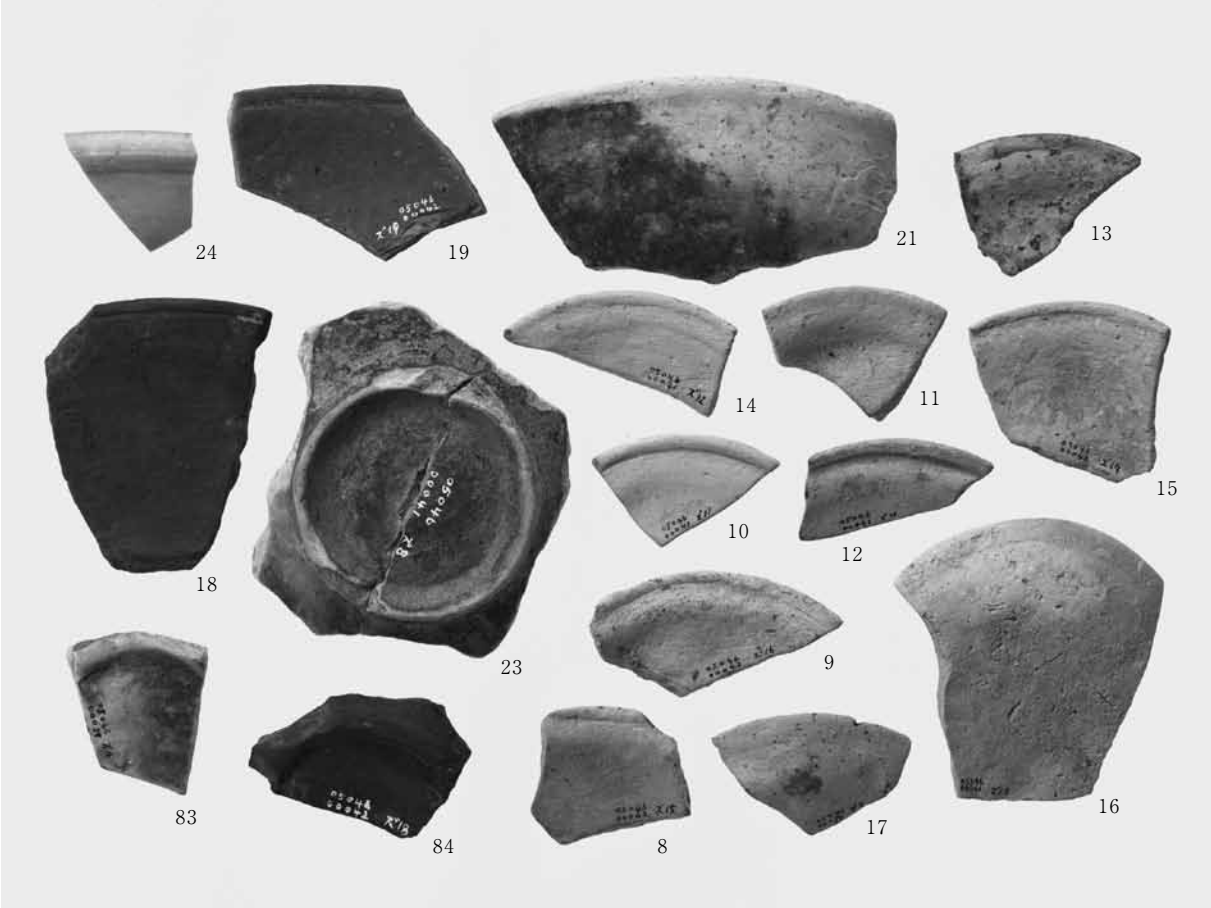

1
6
2

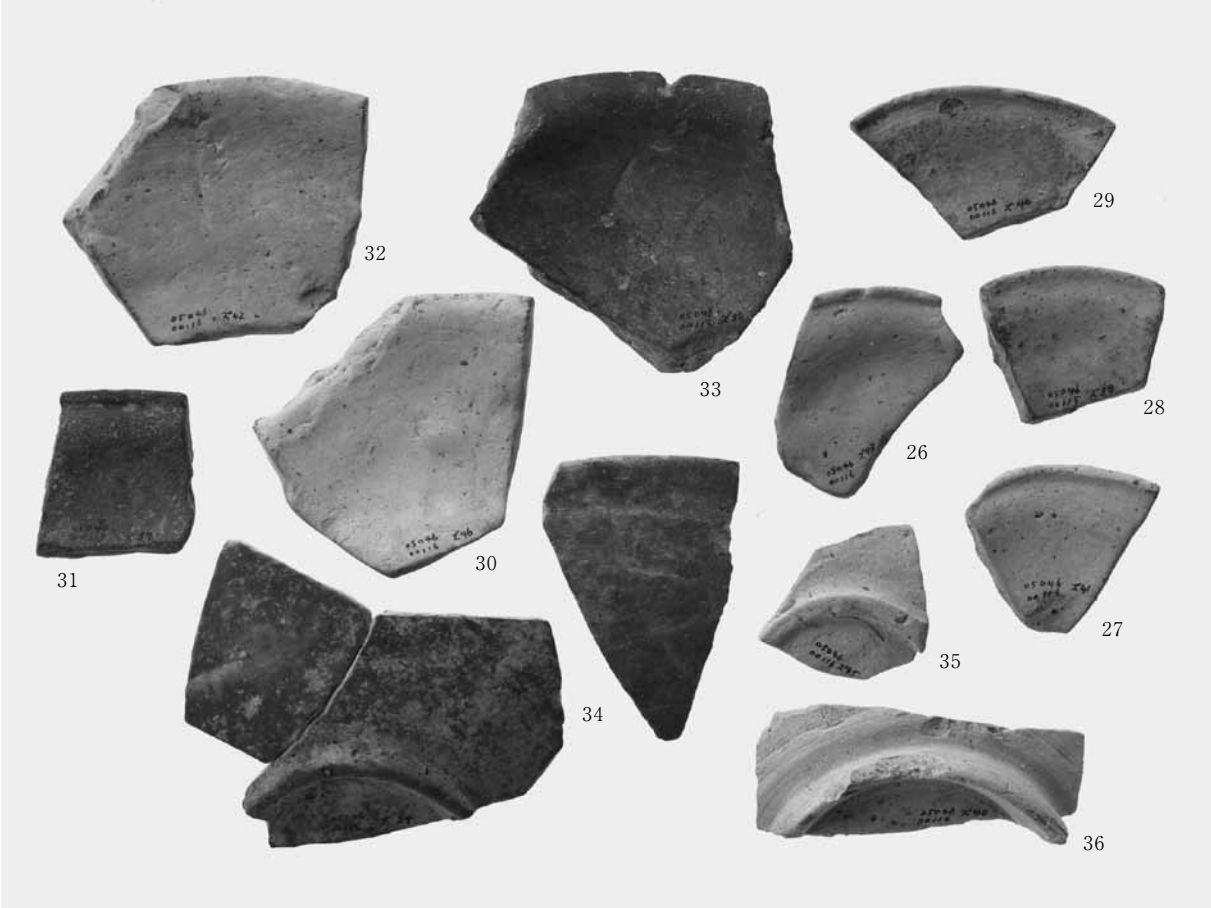
4

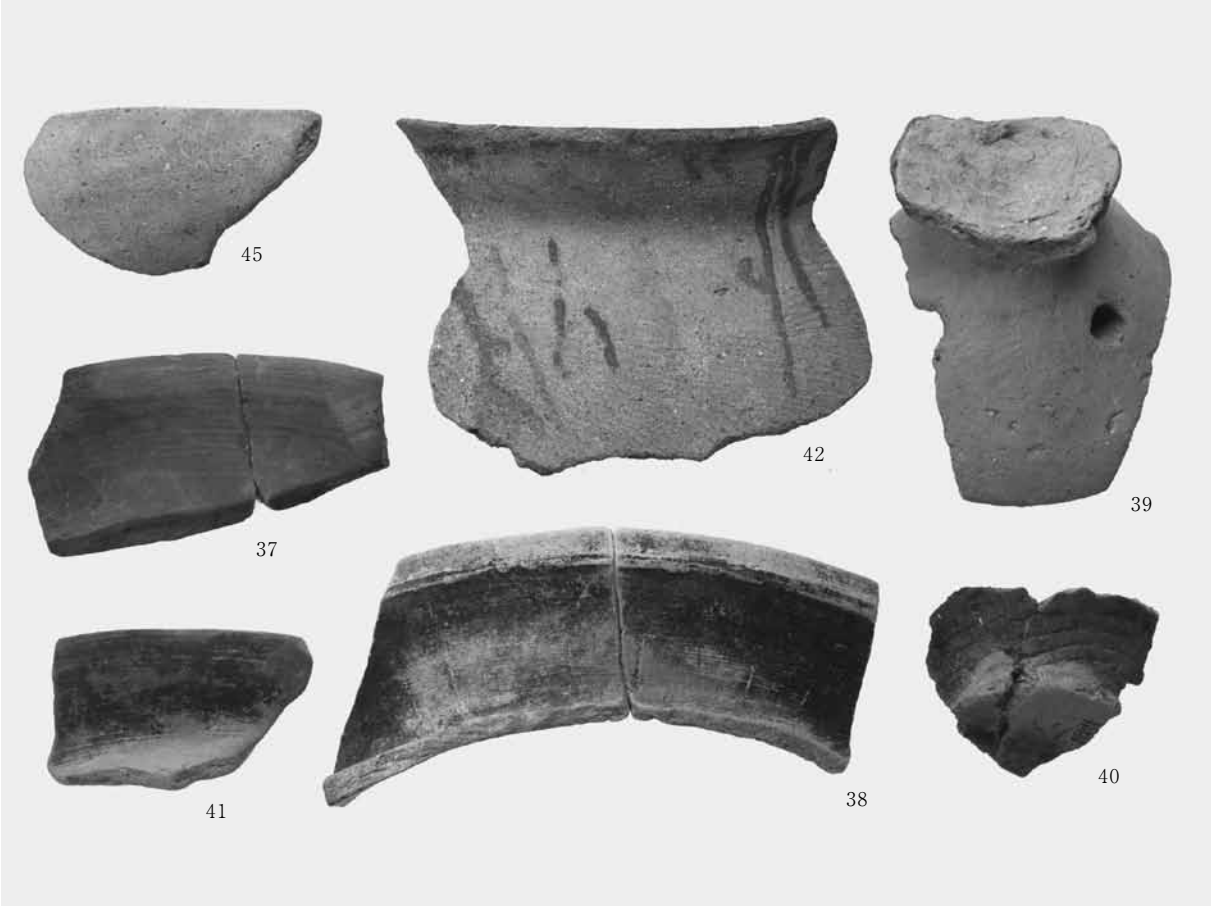


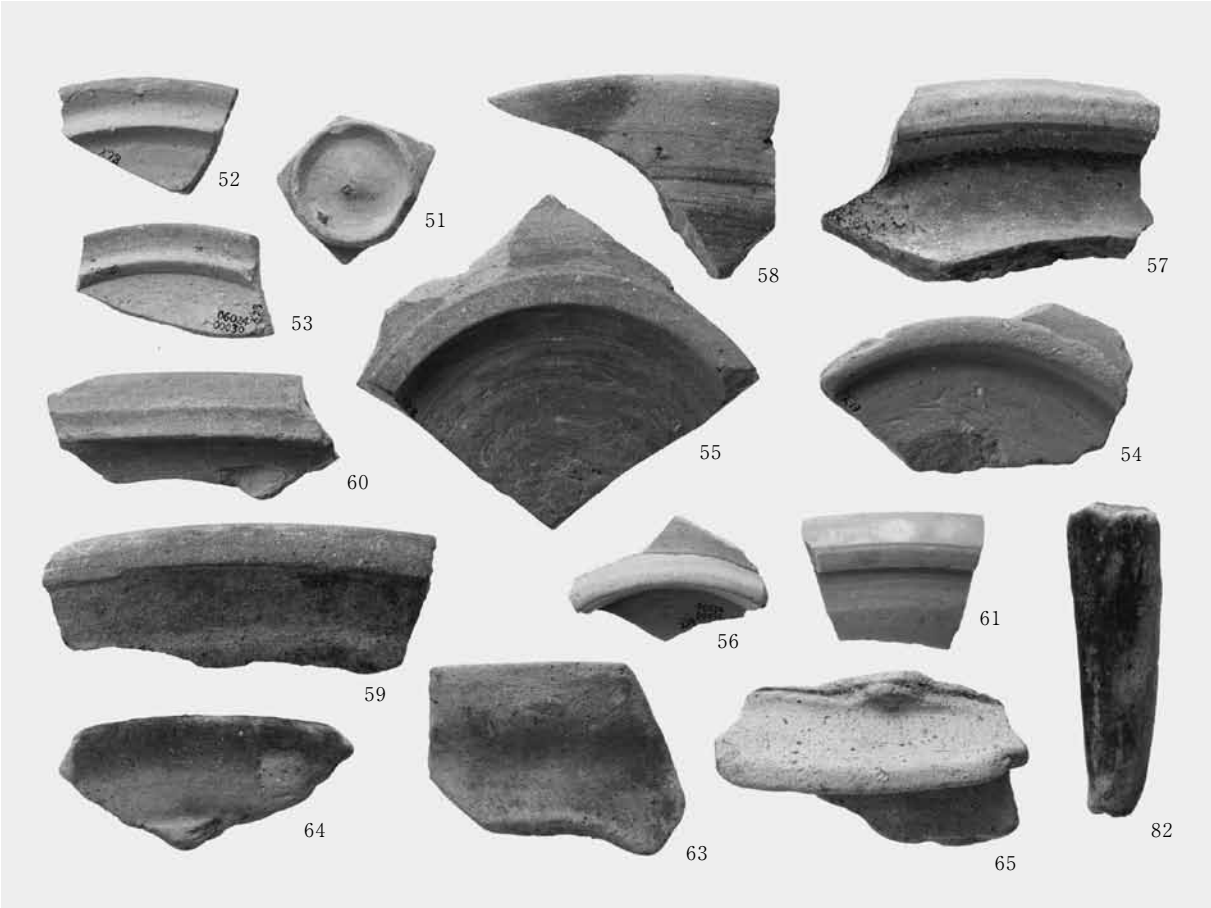
5

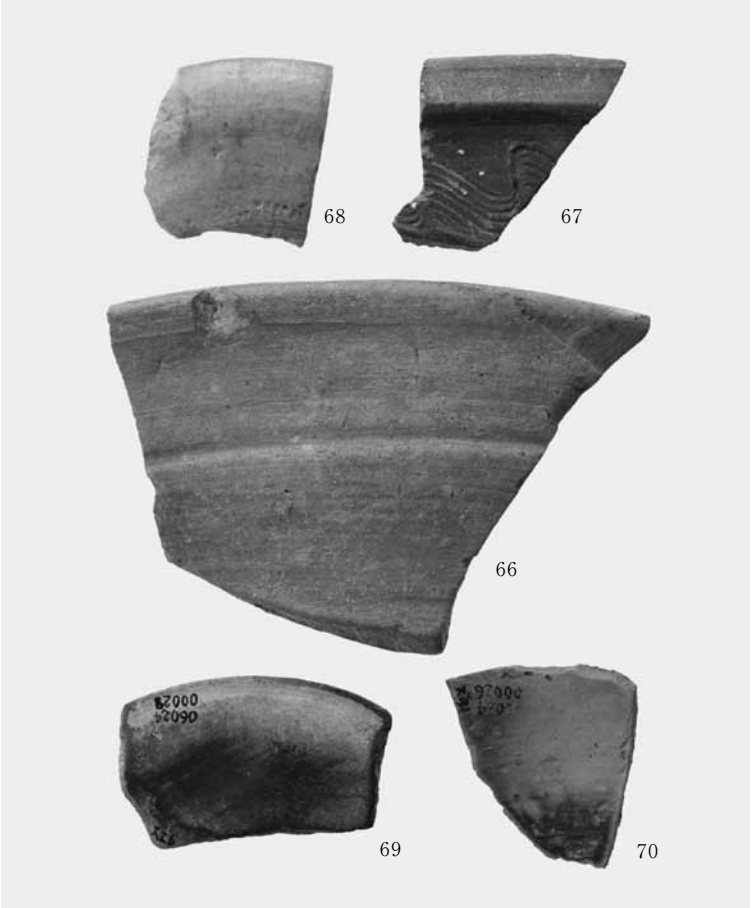
80
81
46
48
49
47

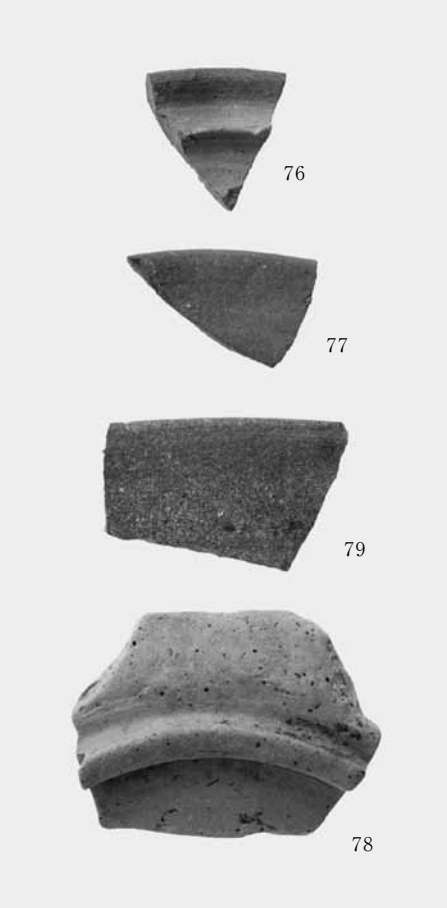

24
19
21
13
14
11
15
18
10
12
23
9
16
83
84
8
17

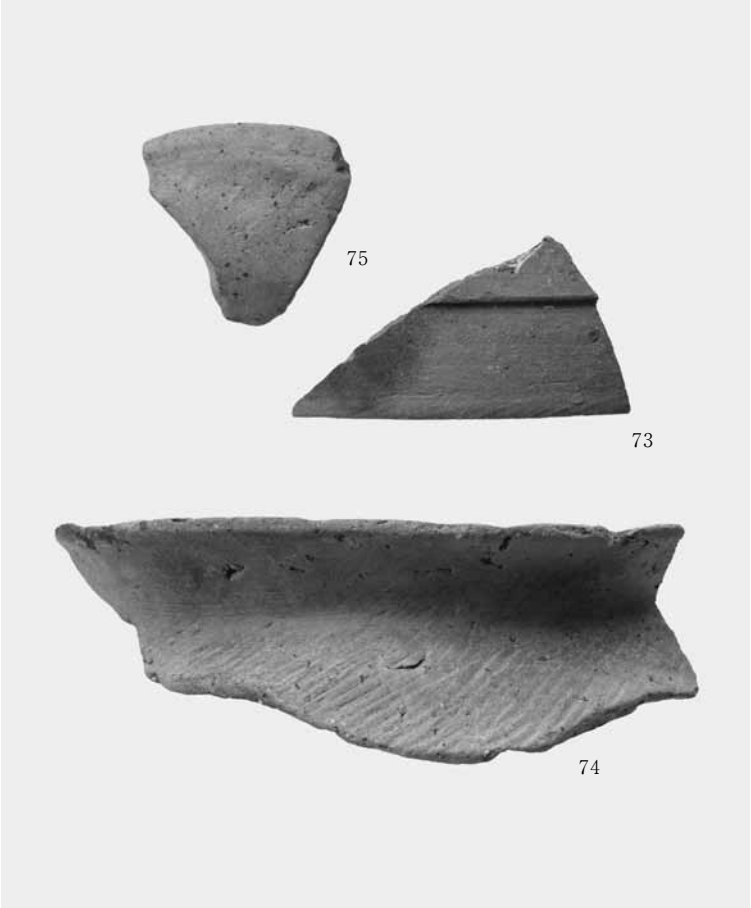

32
29
33
28
26
31
30
27
35
34
36


45
42
39
37
38
40
41


52
51
58
57
53
55
54
60
61
56
59
64
63
65
82


68
67
66
69
70


76
77
79
78


75
73
74

71
72

大阪府埋蔵文化財調査報告２０１０－４

鮎 川 ・ ミ ク リ 遺 跡

―都市計画道路富田奈佐原線整備に伴う発掘調査―

発　行　大阪府教育委員会
〒540－8571　大阪市中央区大手前２丁目
TEL 06－6941－0351（代表）

発行日　平成23年３月31日

印　刷　㈱近畿印刷センター
〒582－0001　柏原市本郷５丁目６番25号